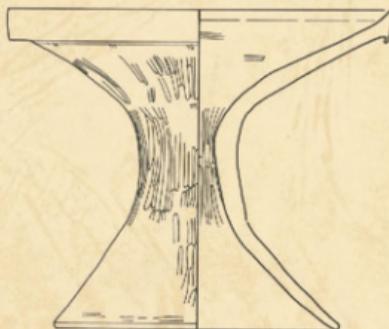


鳥取県八頭郡船岡町

奈免羅・西の前遺跡

中小河川改修事業八東川改良工事に伴う発掘調査

寄贈



1986



鳥取県郡家土木事務所
鳥取県八頭郡船岡町教育委員会

序

このたび、中小河川改修事業八東川改良工事の一環として、八東川左岸の船岡町下濃地区で護岸工事が実施されることになりました。工事対象地区が、周知の埋蔵文化財包含地「奈免羅遺跡」を含むため、遺跡破壊が避けられない状況となり、1985年10月上旬より発掘調査を実施いたしました。発掘調査開始時、土砂採取によって遺跡の破壊が進んでおりましたが、溝状遺構、土壙、横穴式石室の一部（奈免羅古墳）が検出されました。土器も実測できたものだけでも170点以上を数えております。

工期の関係上調査は緊急を要していましたが、町文化財保護委員も参加して調査を実施し、昭和60年11月上旬までに終了いたしました。

船岡町教育委員会ではこれら発掘調査で得た成果をさらに活用し、埋蔵文化財に対する理解がより深められるよう一層努力してまいりたいと考えております。

調査に当って終始献身的にご指導いただいた鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの職員並びに山根雅美主任調査員、及び作業にご尽力いただいた地元関係者の方々に対して厚くお礼申し上げます。

1986年3月

船岡町教育委員会教育長

西 尾 親 義



例　　言

1. 本報告書は1985年度中小河川改修事業八東川改良工事に伴う八頭郡船岡町下瀬に所在する西の前・奈免羅遺跡、奈免羅古墳の発掘調査記録である。
2. 出土遺物の整理は、鳥取県埋蔵文化財センターにおいて、田中出夫、山本久美恵の協力を得て山樹雅美が行なった。
3. 遺跡、遺構の実測は、清水律洋、橋本正太郎、岩見一郎、山樹雅美が行なった。遺物の実測は山樹雅美、田中出夫が行なった。
4. 遺跡、遺構、遺物の写真撮影は山樹雅美が行なった。
5. 図面の浄書は主に山本久美恵が行ない山樹雅美が補足した。
6. 本報告書の執筆、編集は山樹雅美が行なった。
7. 出土遺物、図面等は船岡町教育委員会で保管されている。
8. 発掘調査に際し、鳥取県教育委員会文化課からの御指導をいただいた。

田中精夫

9. 遺物整理・報告書作成にあたっては鳥取県埋蔵文化財センターの方々から御指導、御教示をいただいた。

野田久男 久保禪二朗 中村徹 細見安明

10. 船岡町坂田下荒神古墳出土の乳文鏡（鳥取県立博物館蔵）の写真撮影、実測に際し、鳥取県立博物館の方々からの御協力をいただいた。

加藤隆昭 坂本敬司

11. 本誌に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鳥取南部」「若桜」を使用した。
12. 図中の方位は磁北をさす。

（敬称略）

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯..... 1

第2節 発掘調査の経過..... 1

第3節 調査方法と体制..... 2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境..... 3

第2節 歴史的環境..... 4

第3章 調査の内容

第1節 調査の概要..... 10

第2節 検出された遺構・遺物..... 12

1 溝状遺構..... 12

2 土壙..... 22

3 奈免羅古墳..... 24

第4章 まとめ

第1節 補文時代の土器..... 40

第2節 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器..... 40

挿 図 目 次

挿図 1 調査区状況図..... 2

挿図 2 船岡町の位置..... 3

挿図 3 奈免羅・西の前遺跡周辺遺跡分布図..... 5

挿図 4 調査区遺構配置図..... 11

挿図 5 第1号～第3号溝状遺構実測図..... 折込

挿図 6 第4号・第5号溝状遺構実測図..... 折込

挿図 7 第1号溝状遺構出土遺物実測図①..... 14

挿図 8 第1号溝状遺構出土遺物実測図②..... 15

挿図 9 第1号溝状遺構出土遺物実測図③..... 16

挿図10 第1号溝状遺構出土遺物実測図④..... 17

挿図11 第1号溝状遺構出土遺物実測図⑤..... 18

挿図12 第1号溝状遺構出土遺物実測図⑥..... 19

挿図13 第4号・第5号溝状遺構出土遺物実測図	20
挿図14 第4号溝状遺構出土遺物実測図	21
挿図15 第1号・第2号土壤実測図	22
挿図16 第3号土壤実測図	23
挿図17 第4号土壤出土遺物実測図	23
挿図18 第4号土壤実測図	23
挿図19 奈免羅古墳石室残存部実測図	25
挿図20 奈免羅古墳出土遺物実測図	26
挿図21 大谷平古墳出土高坏実測図	27
挿図22 第4号溝状遺構検出中出土縄文土器実測図	40

図版目次

- 図版1 調査区全景、第1号溝状遺構完掘状況
- 図版2 第1号溝状遺構A-A'土層断面、遺物(Po 76)出土状況、遺物(Po 107)出土状況、第1号溝状遺構にて
- 図版3 第2号溝状遺構完掘状況、第3号溝状遺構完掘状況
- 図版4 第4号・第5号溝状遺構完掘状況、第4号溝状遺構遺物出土状況
- 図版5 第3号土壤完掘状況、第1号・第2号土壤完掘状況、第4号土壤完掘状況、第4号土壤遺物(Po 169)出土状況
- 図版6 奈免羅古墳石室残存状況
- 図版7 第1号溝状遺構出土遺物①
- 図版8 第1号溝状遺構出土遺物②
- 図版9 第1号・第4号・第5号溝状遺構出土遺物
- 図版10 第4号溝状遺構出土遺物
- 図版11 貝による施紋実験
- 図版12 奈免羅古墳、大谷平古墳出土須恵器

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

今回調査を行なった奈免羅・西の前遺跡は、中小河川改修事業八東川改良工事に伴うものである。本遺跡は1976年段階で、鳥取県教育委員会の分布調査によって土器の散布が確認され、その時点では「奈免羅遺跡」として鳥取県教育委員会の遺跡台帳、遺跡地図に記載され、周知の埋蔵文化財包含地として登録されていた。1985年4月下旬、船岡町建設課が、鳥取県郡家土木事務所に対し、上記の事業のため既に鳥取県の所有地となっていた本遺跡地内での土砂採取の許可を求めた。この要請に対し、鳥取県郡家土木事務所が鳥取県教育委員会文化課等文化財担当諸機関と未協議のまま、町教育委員会においても事業課に対する遺跡の周知並びに連携不十分のまま、船岡町建設課にその許可を出し、その後、同年6月中旬までに船岡町建設課が土砂採取を行なったところ、須恵器完形品、石室の一部を検出するに至った。この時点では遺跡破壊が船岡町教育委員会の知るところとなり、町教育委員会が鳥取県教育委員会に連絡、これを受けた県教育委員会が同年6月19日に現地に赴き、横穴式石室の存在を確認し「奈免羅古墳」と命名、工事の停止、発掘調査の必要性を指示した。この時既に「奈免羅古跡」の中央部には幅約15mの大溝が岩盤まで穿たれて遺跡は分断され、「奈免羅古墳」は石室の一部をかろうじて残すのみとなっていた。この後、同年9月19日に船岡町教育委員会が鳥取県郡家土木事務所より発掘調査の委託を受け、同年10月11日より発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は、工期（1986年3月工事終了予定）の関係から緊急性を帯びていた。そのため調査区の設定は、当初鳥取県教育委員会文化課の指導のもと、最小限度に留めた（208m²）。しかし、遺構の調査区外への延長、当初調査予定地外での土器の採集があり、調査区の拡張（173m²）を余儀なくされた。この時点で、小字名に従って、当初予定地を西の前地区、予定地外土器採集地を奈免羅地区と命名して調査を行なった（挿図1）。丸礫と工事車両によって踏み固められた表土に掘り下げは困難を極めたが、調査作業員の手に内刺をつくりながらの協力によって、11月7日に現地調査を終了することができた。調査の経過については調査日誌（抄）を参照されたい。現地調査終了後、鳥取県埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理を行ない、当センター職員の方々の助言指導のもと、1986年3月25日に全ての整理作業を終了することができた。

調査日誌（抄）

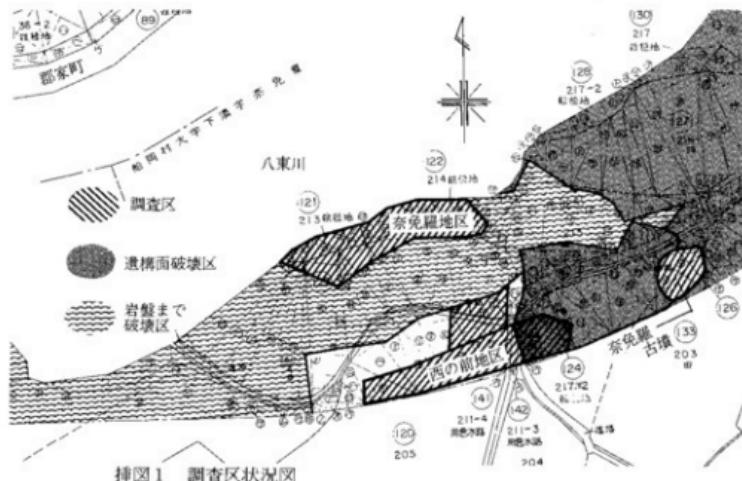
- 10月5日 鳥取県教育委員会文化課田中精夫文化財主事指導のもと調査区を設定。（西の前地区）
10月11日 発掘調査開始。トレーナーを設定し掘り下げ。第1号溝状遺構検出。
10月12日 調査員立会のもと、重機を使用して工事の廃土及び表土を除去。
10月15日 西の前地区、遺構検出終了。第1号溝状遺構は調査範囲をこえて北東方向に延びる様相を呈する。加えて奈免羅地区において土器の散布が認められ、調査区の拡張をせまられる。第1号溝状遺構掘り下げ開始。
10月22日 第1号溝状遺構を追い、西の前地区北東方向に調査区拡張。掘り下げ難渋を極め、作業員・調査員とも疲労困憊。
10月24日 第1号溝状遺構完掘。調査員・作業員とも征服感に酔う。奈免羅地区調査開始。
10月25日 西の前地区調査終了。
10月26日 奈免羅地区、調査員立会のもと重機による表土はぎ。
10月30日 奈免羅古墳調査開始。奈免羅地区遺構検出中。
11月1日 奈免羅地区において第4号・第5号溝状遺構検出。掘り下げ開始。
11月6日 第4号・第5号溝状遺構完掘。全域掘削し、遺跡全景写真撮影。
11月7日 現地調査終了。

第3節 調査方法と体制

調査対象地区となったのは、八東川左岸の船岡下濃字西の前203番地、205番地、211-3・4番地(西の前地区)、宇奈免羅212番地、213番地、214番地(奈免羅地区)所在の散布地(381)m²—奈免羅・西の前遺跡、字西の前203番地所在の古墳—奈免羅古墳である。調査開始時西の前地区の表土上に土砂採取の際に盛られたと考えられるコンクリート塊を含む土砂があったことと調査の緊急性を考慮に入れ、表土までの掘り下げは重機を用いて行なった。遺構及び遺物の出土状況の実測は、調査区の主軸にほぼ沿う様に5mごとに基本杭を通し、その基本杭を基準として5m区画メッシュを組み、平板測量及び簡易造り方測量を用いて、作業員の協力のもと調査員が行なった。写真撮影は白黒・カラーリバーサルフィルムを用いて行なった。調査体制は下記の通りである。

調査体制

調査委託者	鳥取県郡家土木事務所
調査主体	船岡町教育委員会
調査団長	西尾親義(船岡町教育委員会教育長)
調査指導	野田久男(鳥取県埋蔵文化財センター指導係長) 田中精夫(鳥取県教育委員会文化課文化財主事) 絹見安明(鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事)
主任調査員	山樹雅美(委嘱調査員)
調査員	浦林寿男 田中登貴夫 菊田豊治(以上、船岡町文化財保護委員)、林郁夫 清水偉洋 橋本正太郎 岩見一郎(以上、船岡町教育委員会事務局)
作業員	岩成文子 浦林はる江 小河寿須江 小河千代子 上月すえ子 清水電子 清水とし子 中尾登善 西尾芳江 浜本たつの(50音順)



第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

奈免羅・西の前遺跡は八頭郡船岡町北部の下濃字奈免羅、字西の前に位置する。

鳥取県 鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置し、北方には日本海が広がり、南方には中国山地が連なる。その範囲は南北約60km、東西約126kmと東西に細長く、総面積は34,9234km²と国土の約1%を占める。前方に海、後方に山地を控えた県土は、約75%が山林であり、生活領域は、県東部を流れる千代川、中部を流れる天神川、西部を流れる日野川の各流域に形成された沖積平野上に展開する。これら県内三大河川の下流域には、それぞれ、鳥取平野、倉吉平野、米子平野が開けており、鳥取市、倉吉市、米子市として、現在県下の政治経済の拠点となっている。下流域の平野の沿岸部には砂丘が発達しており、各平野を連結している。なかでも鳥取平野の沿岸部に広がる鳥取砂丘は、国立公園として有名である。上流域には、河川の流れが急である為に広い平野は形成されず、三大河川の支流に沿って細長い谷が山地に食い込む様にのびており、集落も各谷沿いに形成されている。

八頭郡船岡町 県南東部、千代川上流域に位置する八頭郡は、北は鳥取市と岩美郡、東は兵庫県南は岡山県、西は東伯郡と氣高郡に接する。地形的には山がちで、山地が総面積の約8割を占め北流する千代川とその支流域に沿って僅かに平野が存在する。古くは、八上郡、智頭郡、八東郡の三郡として行政区画されていたのだが、1896(明治29)年にこれら3郡が合併して八頭郡となった。現在八頭郡は、郡家町・船岡町・河原町(旧八上郡)、八東町・若桜町(旧八東郡)、用瀬町・智頭町・佐治村(旧智頭郡)の7町1村によって構成されている。

船岡町は八頭郡の中央部北側に位置する。現在集落は、千代川支流の八東川、さらにその支流の大江川・見櫻川沿いの狭小な沖積平野に形成された河岸段丘上に分布する。面積54.69km²、人口5192人(1983年現在)を数える。奈免羅・西の前遺跡は、八東川左岸の河岸段丘上に位置する。



插図2 船岡町の位置

第2節 歴史的環境

奈免羅・西の前遺跡周辺の歴史的環境を遺跡の分布を中心に八頭郡に限って述べることとする。^{註1}

縄文時代 河川沿いを中心に縄文時代の遺物遺構がいくつか確認されている。現在、前期まで通り得るものではなく、若桜町諸庵広畠野遺跡で確認された中期の土器と石匕が上限である。^{註2} 後期のものとしては、郡家町西御門遺跡（50）よりの磨消繩文土器（福田KⅡ式並行、津雲A・平城式並行）^{註3}・石匕・石錘・打製石斧、同町万代寺遺跡（44）よりの磨消繩文土器（福田KⅡ式系統の浅鉢）、河原町前田遺跡（52）よりの「福田KⅡ式に相当する」土器、用瀬町余井遺跡よりの磨消繩文土器^{註4}が確認されている。^{註5} 晩期のものとしては、条痕文土器が余井遺跡（前掲）、用瀬町鷹狩遺跡より、刻み目突帯を有する浅鉢が万代寺遺跡（前掲）より出土している。^{註6} その他、佐治村畠字イヤ谷で石棒の出土がみられる。^{註7}

弥生時代 八頭郡においては前期に遡る遺物遺構は確認されていない。中期以降になると遺物の出土はかなり見られるのであるが、遺構については弥生時代全般まで範囲を広げてみても、あまり確認されていない。集落の存在を証明する遺構は、船岡町丸山遺跡（45）における中期の堅穴住居跡1棟、万代寺遺跡（前掲）における堅穴住居跡2棟ぐらいであろうか。^{註8} その他、万代寺遺跡（前掲）における中期の土壤墓群、「祭祀溝」を弥生時代の遺構としてあげ得る。弥生時代の遺物を出土した遺跡を列挙すると次の様になる。船岡町丸山遺跡（前掲）—中～後期の土器・石庵丁・分銅形土器品・柱状片刃石斧、同町牧野遺跡—中～後期の土器、同町西ノ岡遺跡（46）—中～後期の土器、河原町上土居遺跡（54）—後期の土器、同町前田遺跡（前掲）—中～後期の土器、智頭町高下—後期の土器、同町向和遺跡—後期の土器、同町段山遺跡—土器、石槍・石庵丁・石錐、用瀬町余井遺跡（前掲）—後期の無頸壺・台付壺、同町鷹狩遺跡（前掲）—土器、磨製石斧、^{註9} 佐治村大段遺跡—磨製石斧、郡家町花原・土師百井・上峰寺—太型蛤刃石斧、同町上津黒—石庵丁、同町西御門遺跡（前掲）—土器・石庵丁^{註10}である。銅鐸は八頭郡内では2点出土している。郡家町下坂で裂縫櫛文銅鐸^{註11}が1点、もう1点は詳細は不明だが、船岡町破岩^{註12}が出土土地であるといわれる。

古墳時代 古墳時代の遺跡は古墳を中心確認されており、集落の存在を証明する遺跡はあまりみられないが、船岡町丸山遺跡（前掲）における4世紀代の堅穴住居跡・貯蔵穴・5世紀代の土壇・「住居区を囲むと推定」される前～中期の溝状遺構^{註13}、これより約2.5km八東川をさかのぼる地点に位置する同町西ノ岡遺跡（前掲）における前期の堅穴住居跡、又、郡家町万代寺遺跡（前掲）における中期の堅穴

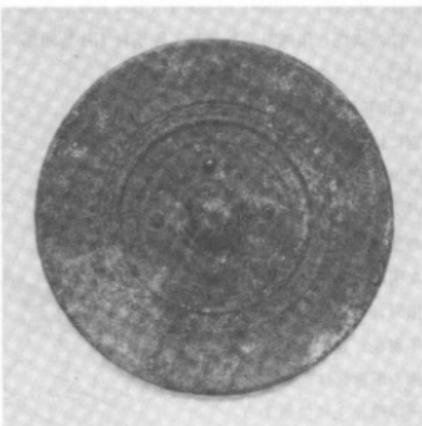


写真1 八頭郡船岡町下荒神古墳出土乳文鏡

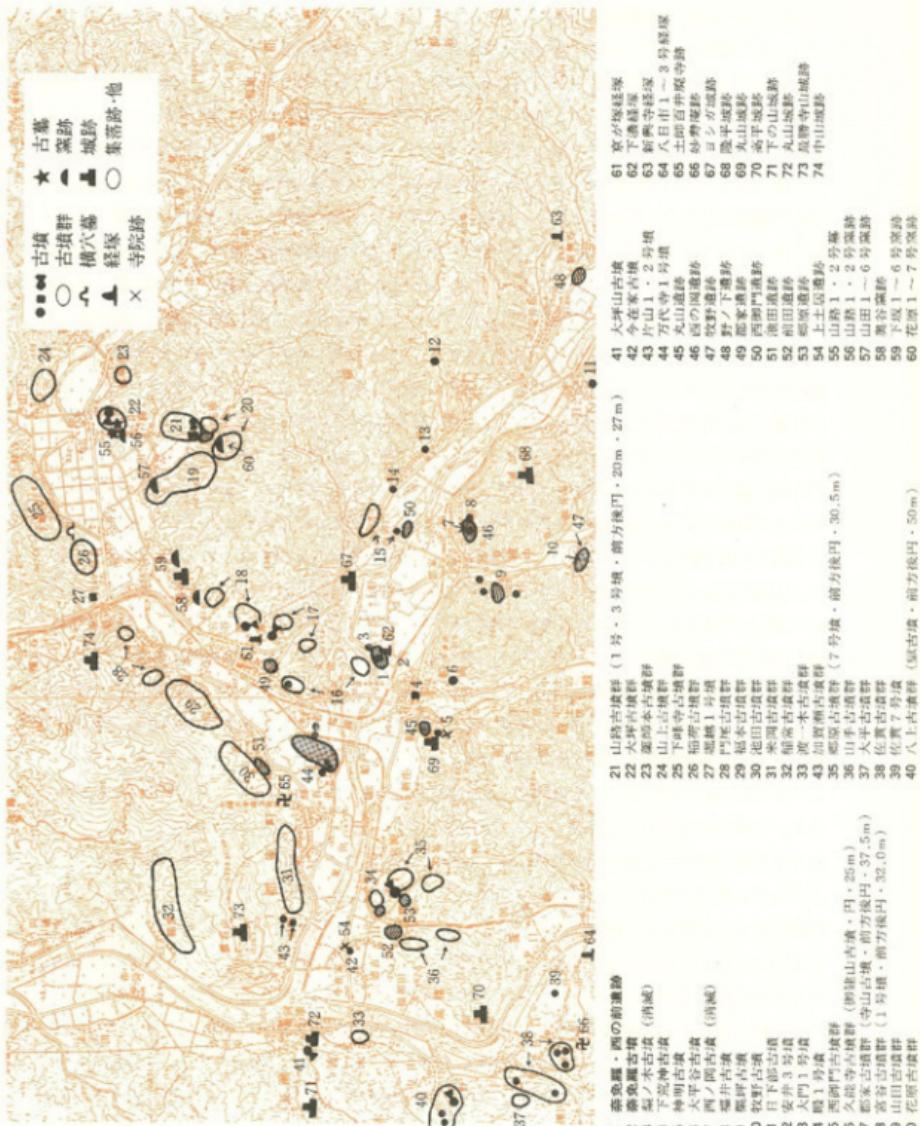


図3 奈免羅・西の前遺跡周辺遺跡分布図

住居跡が知られる。八頭郡内の古墳は現在700基近く確認されているが前中期に遡り得るものは数少ない。周溝内より円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が出土した船岡町丸山古墳（45、円墳、径約20m）、円筒埴輪を囲繞させた郡家町御建山古墳（久能寺25号墳、16、円墳、径約25m²²）、²³仿製乳文鏡（写真2）²⁴が出土した船岡町下荒神古墳（4、方墳、29×22m）²⁵が中期まで遡り得る古墳と考えられるのであるが、いずれも主体部は不明である。又、4世紀代の仿製方格規矩鳥文鏡が出土した八東町重枝1号墳、²⁶銅鏡・勾玉・鉄鎌が出土した河原町山手1号墳（36）、銅鏡が出土した山手2号墳（36）²⁷が、古式の様相を呈する。後期になると、八頭郡内においても例に漏れず、古墳の数が急増する。千代川及びその支流の八東川、私都川、佐治川に面した尾根の中腹及至は山裾に立地するものがほとんどで、郡集墳を形成する。數は少ないのであるが、船岡町奈免羅古墳（2）、同町梨ノ木古墳（3）、智頭町高下古墳等、河岸段丘上に立地するものも点在する。墳形は盛土流出・削平等によって不明なものも多いのであるが、径10~20mの中小規模の円墳が主流を占め、前方後円墳は現在知られるものとして7基に限られる。この内4基が私都川沿いにある。郡家町寺山古墳（寺山1号墳、17、全長約38m）、同町宮谷1号墳（18、全長約32m）、同町山路1号墳（21、全長約21m）、同町山路3号墳（21、全長約27m）がそれである。寺山古墳は片袖の横穴式石室を有し、金環・須恵器・直刀が出土したと伝えられるが、詳細は不明である。宮谷1号墳より甲冑の出土が伝えられるが同様である。他3基は河原町にある。八東川が千代川に合流する辺りの標高84mの山上に位置する河原町郷原7号墳（35、全長約31m）、八頭郡最大の規模をもつ獄古墳（八上1号墳、40、全長約50m）、千代川に向って突き出る尾根の先端辺りに位置する大坪山古墳（41、全長約28m）がそれであるが、3基とも主体部等詳細は不明である。後期以降に属する八頭郡内の古墳は、横穴式石室を内部構造とするものが多く、中には河原町大坪古墳（37）、須恵器・鉄鎌・刀子・直刀を出土した船岡町大谷平古墳（6、挿図21）の様に、石室内にさらに箱式石棺を設置するものがある。又、郡家町米岡1号墳・58号墳（31）、同町福本4号墳（29）、河原町大平古墳（前掲）²⁸の様に石室内に線刻を施す所謂装飾古墳も存在し注目に値する。内部構造を横穴式石室としないものは箱式石棺を用いることを通例とする。特異なものとしては陶棺を用いる大平2号墳（37）がある。石室等より出土する遺物としては須恵器、玉類、鎌・刀等の鉄製武具があるが、郡家町久能寺16号墳（16号河原町大平3号墳（37）、智頭町黒本谷古墳、用瀬町余井古墳の様に馬具が出土したものもあり、中でも黒本谷古墳は圭頭太刀・銅鏡も出土しており注目されるところである。船岡町内に目を移すと、後期以降の古墳として、上述の大谷平古墳、奈免羅古墳、両袖の横穴式石室を有し直刀・須恵器等を出土した西ノ岡古墳（7）、牧野古墳（47）、勾玉・須恵器の出土が伝えられる梨の木古墳（3）があげられる。以上の5古墳の内梨の木古墳は未調査のまま消滅、西ノ岡古墳・牧野古墳は調査後消滅、今回調査の奈免羅古墳も調査後河川改修によって消滅する。古墳時代末期の墓制として注目され、近年発掘例の増加がみられる横穴墓は、八頭郡内において群集するかたちでは確認されていないが、郡家町下峰寺に1基（25）、同町宮谷に1基（18）、河原町佐貫に2基（仙人横穴群）、同町天神原に1基知られている。横穴墓は現地形からその存在を確認することが容易ではなく、斜面削平中に発見されることが多いため、今後の調査において類例が増加するものと思われる。古墳時代には、弥生土器からの製作技術体系を受け継いだ土師器の

他に、窯を用いた新しい体系を取り入れた須恵器の生産が始まる。この窯跡(6世紀)が郡家町福地などで確認されている。^{註35}

古代 白鳳期(7世紀後半)建立の寺院跡で、法起寺式の伽藍を有する土師百井廃寺を第1にあげることができる。南北1町半、東西1町の寺域を持つ。^{註36}現在塔礎石の完存する塔跡が国の史跡となっている(65)。土師百井廃寺跡から北東に約3kmの郡家町奥谷には、この寺院の瓦を焼いたといわれる奥谷窯跡⁽⁵⁸⁾があり、その他郡家町山路(56)・山田(57)・花原(60)・下坂(59)・天神原、河原町牛の戸に須恵器窯がある。次に郡家町万代寺遺跡(前掲)^{註37}で発見された八上郡衙跡があげられる。70×40尺の規模をもつ正殿、東西脇殿、後殿、四至を画する溝、柵列が検出された。^{註38}ここより「土師百井第1様式」—重圓文八葉素弁蓮華瓦^{註39}が出土していることから、上述の土師百井廃寺との関係が注目される。更に八上郡衙跡の南東約3.5kmに位置する船岡町西ノ岡遺跡(前掲)^{註40}で、奈良時代の掘立柱建物跡と円面鏡が出土しており、調査報告書内で「円面鏡の出土状況より(略)、奈良時代のこの付近の主要建造物があったものと推定され」という指摘があり、この点も八頭郡衙との関連を考えなければならないところである。その他の古代遺跡としては、平安時代の経塚があげられる。瓦経・耳環等が出土した河原町八日市1号経塚(64)、鉄製経筒・銅製経筒とそれを入れる外容器が出土した用瀬町東光寺経塚があり、平安時代の宗教生活を知る上で貴重なものである。船岡町下濃にも経塚があり、平安時代のものという話も聞くが、詳細は明らかではない。

中・近世 中・近世の遺跡としては、古墓、経塚、井戸跡、城跡等が知られている。古墓は、古備前壺が出土した船岡町橋本遺跡、同町牧野遺跡(10)において検出された木棺墓、室町時代～安土桃山時代のものといわれ陶製骨蔵器・片口小壺・土師質皿・宋錢・五輪塔・宝篋印塔が出土した郡家町山路1号墓(55)、同町万代寺遺跡(前掲)^{註41}で検出された室町時代の「灯明皿遺構」^{註42}があげられる。経塚は、銅板製経筒・陶製外容器・松葉散雀鏡・経巻・銅錢が出土した皆頭町三田経塚(鎌倉時代)、鏡・木製櫛・経筒・直刀が出土した郡家町京ヶ塚(61)、室町時代)がある。井戸跡は、河原町前田遺跡で発掘された。木枠を用いた井戸で、中から備前壺・漆椀・青磁・白磁が出土している。注目されるのは呪符・ミニチュア舟の出土で、「まじなひ世界の一画を雄弁に語る重要な資料」^{註43}である。城跡は戦国期の山城がほとんどであり、小さいものを含めると30以上を数える。

註1 遺構遺物の存在を確認する資料として発掘調査報告書等の文献を用いたものは、本文中に註を設けてその出典を明記した。註を設けていないものは、鳥取県教育委員会の遺跡分布カードを資料としたものである。

註2 郡家町教育委員会『万代寺遺跡発掘調査報告書』1983年において縄文時代早期の落し穴の存在が述べられている。しかし、その時代決定が落し穴中の埋土(火山灰)を根拠として行なわれているため、すぐには首肯し難く、ここでは除外しておこう。

註3 『鳥取県史』1原始古代

註4 註2報告書

註5 河原町教育委員会『河原町埋蔵文化財報告書第1集 前田遺跡発掘調査報告書』1983年

註6 用瀬町教育委員会『用瀬町余井古墳調査報告書』1979年

註7 註6

註8 註3

- 註9 船岡町教育委員会『丸山遺跡発掘調査報告書』1979年
- 註10 船岡町教育委員会『牧野遺跡発掘調査報告書』1980年
- 註11 船岡町教育委員会『西ノ岡遺跡発掘調査報告書』1981年
- 註12 智頭町教育委員会『智頭町埋蔵文化財報告書2 高下古墳発掘調査報告書』1984年
- 註13 註3。
- 註14 郡家町教育委員会『土師百井廐寺跡発掘調査報告書I』1979年
- 註15 註3。
- 註16 註3。1954年に国の重要美術品に指定されている。
- 註17 註3。『因幡志』に寛政7年に発見されたとあるが現存しない。
- 註18 註9。
- 註19 註11。
- 註20 註2報告書。
- 註21 鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県埋蔵文化財シリーズ1 鳥取県の古墳』1986年
- 註22 註9報告書において調査者は丸山古墳のことを「円形周溝墓」としているが、それに対する説明がなされていない。そのためここでは円墳としておく。
- 註23 八頭郷土文化研究会『久能寺傳建山古墳の発掘調査―報告概要―』
- 註24 野田久男氏作成の「鳥取県内出土銅鏡一覧」(『鳥取埋文センターニュース』No.5 鳥取県埋蔵文化財センター1983年)。この鏡の写真撮影及び計測の際には、鳥取県立博物館加藤隆昭氏及び坂本敬司氏の御協力を得た。鏡の計測値—径8.2cm、厚0.27cm、圓面文帶幅0.29cm、複波文帶幅0.34cm、稚唐文帶幅0.34cm、乳径0.30~0.33cm、鍔1.50cm×1.29cm
- 註25 註24一覧表
- 註26 註24一覧表
- 註27 註5。
- 註28『船岡町誌』
- 註29 註14。
- 註30 註3。
- 註31 智頭町教育委員会『智頭町埋蔵文化財報告書1 中河原古墳黒本谷古墳発掘調査報告書』1983年
- 註32 註6。
- 註33 註11。
- 註34 註10。
- 註35 註14。
- 註36 註14。
- 註37 註3。
- 註38 註2報告書及び、郡家町教育委員会『埋もれていた郷土の古代』1983年
- 註39 註2報告書。註14。
- 註40 註9。
- 註41 註10。
- 註42 郡家町教育委員会『山跡遺跡発掘調査報告書』1974年
- 註43 註2報告書
- 註44 水野正好「前田遺跡発見のまじなひ札—その働きと用いられる場」(註5)
- 註45 以上遺跡分布については、鳥取県埋蔵文化財センター野田久男氏に多くの御教示を得た。

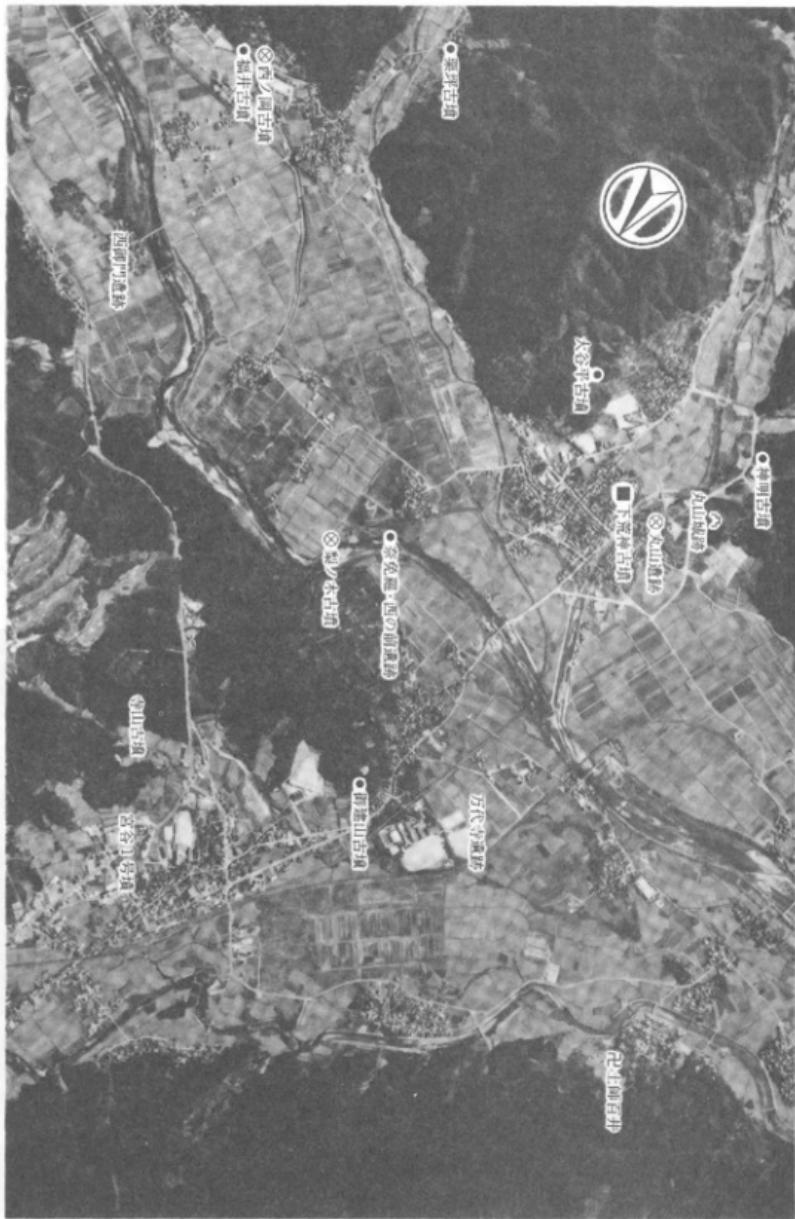


写真2 航空写真

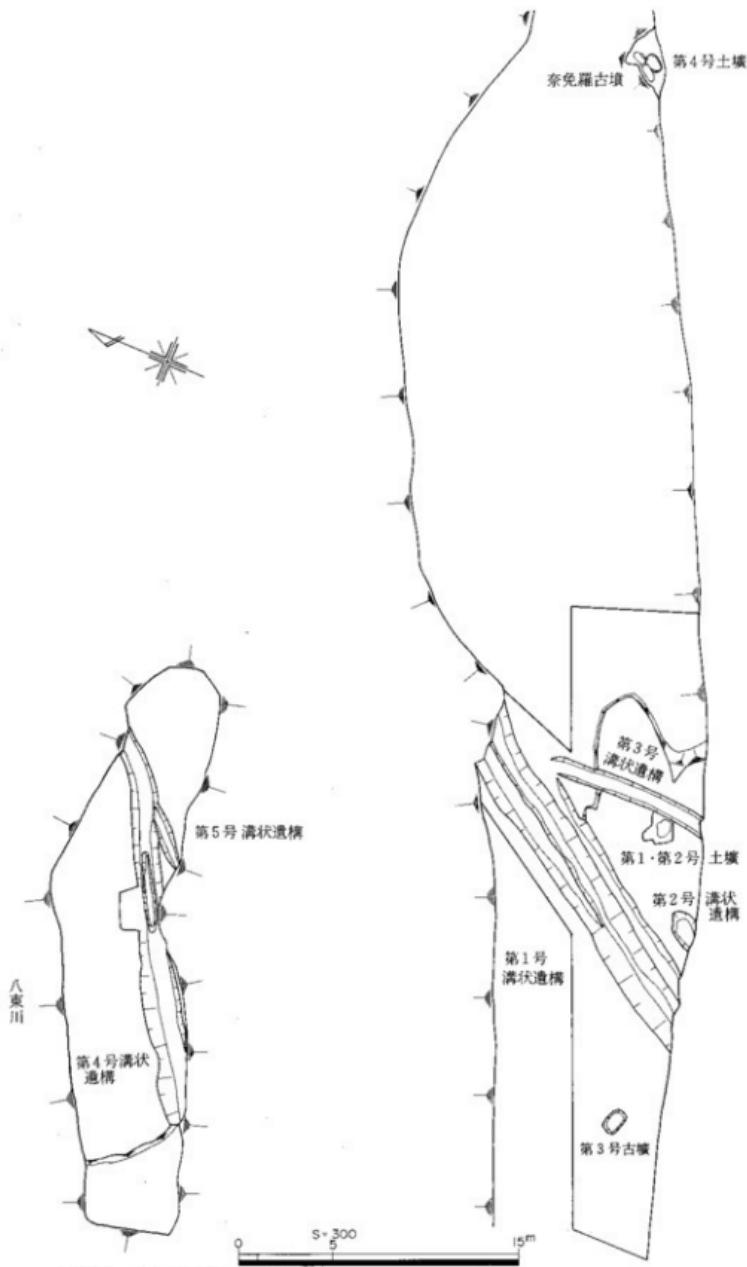
第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

今回調査対象となった奈免羅・西の前遺跡、奈免羅古墳は、八東川左岸の河岸段丘上に位置する。奈免羅・西の前遺跡は、鳥取県教育委員会の遺跡分布調査によって「奈免羅遺跡」という名称で土器散布地として周知されていたものである。奈免羅古墳は、「奈免羅遺跡」の一画に位置し、1985年にに行なわれた土砂採取の際に発見されたものである。調査開始時の遺跡の破壊状況がかなり進行していたにもかかわらず、いくつかの遺構とコンテナ箱9杯分の遺物を検出することができた。検出された遺構は溝状遺構5、土壙4、奈免羅古墳横穴式石室の一部である。溝状遺構の内、第1号溝状遺構と第4号・第5号溝状遺構からは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が、合わせて200点近く出土しており、その器種も壺、甕、高环、器台、碗、鉢、蓋、手づくね土器とバラエティーに豊み、赤色塗彩を残すものも出土している。第3号溝状遺構はごく最近まで使用されていた水路、第2号溝状遺構は不明である。土壙の内、遺物が出土したのは第4号土壙のみで、他は遺物が出土しなかった。奈免羅古墳横穴式石室は、「遺体の一部」ともいるべきもので、腰石2個を残すのみであった。調査中の出土遺物はなく、本報告書に掲載したものは土砂採取中に出土したものである。以上の遺構・遺物の他、第4号溝状遺構検出中に縄文時代中期の土器の口縁部片が出土した。縄文時代の遺物が船岡町内で出土したのはこれが初めてであり船岡町の縄文時代を解明する端緒となる重要な遺物であると考える。



写真3 第1号溝状遺構掘り下げ作業



插図4 調査区遺構配図

第2節 検出された遺構・遺物

1. 溝状遺構

第1号溝状遺構（挿図5、7～12、図版1、2、7～9）

第1号溝状遺構は、西の前地区を横断する様に、主軸をN-35°-Eにとって走る溝である。埋土に入頭大以上の礫が多量に含まれていたことに加え、調査前に本遺構の南西側が既に道路として使用され、工事車輛等の往来によって踏み固められていたため、遺構の掘り下げは困難を極めた。そのため、遺構掘り下げには鶴嘴の使用も余儀なくされた。第1号溝状遺構は南西側が調査区外へ入り込み、北西側が土砂採取の際に既に破壊されていたため、全貌を明らかにすることはできなかったが、長さ約18mにわたって確認することができた。それはほぼ直線的に走るのであるが、北東端でわずかに東方向へ曲がっていく様相を呈する。遺構が円礫を多量に含む砂層を掘り込んで造られているため、その側壁には円礫が多く顔を覗かせ、入意的に石を配置したと見紛う程であった。遺構の規模は検出面で最大幅3.6m、底面で最大幅0.8m、検出面からの最大深1.6mを測る。溝の南東辺は、検出面から約0.3m下った辺りで、幅0.3m～0.7mのテラスを有し、北西辺は底面から約0.2m上った辺りで、最大幅0.8mのテラスを有する。横断面形は、テラス部を捨象して考えれば、南西側で「V」字形、北東側で「U」字形を呈する。縦断面形を見ると、底面高は南西側が北東側より高くなっている、水を流せば近くを流れる八東川の下流方向から上流方向へ流れる。

埋土は全体的に黒褐色を呈し、分層線は不明瞭であったが、礫等の含有物、色調のわずかな変化によって分層したところ、南東側から北西側に向って土砂が流入した様子が窺われた。ただ、第②・③層はその固さにおいて他層と異なり、非常にしまりがよい。第②・③層が流入した後、ある程度の時間的経過を経て、第④層以上が短期間に流入したものであると考える。

出土遺物の内図化できたものは、壺甕類Po 1～Po 102、高杯Po 103～Po 106、器台Po 106～Po 112、蓋Po 113～Po 117、碗Po 124、脚付の底部Po 121、Po 122、台付の底部Po 123、鉢Po 125、Po 126、小型品Po 118～Po 120、Po 127である。この内Po 90は意図的に碎いたと思われる細片で出土した。復原の結果、赤色塗彩を外面全体に施す壺となった。底部近くにススが付着しており、火に焼いた後に破碎して溝中に捨てられたものであると考えられる。又、Po 89は脚付の壺で、外面及び内面の一部を丁寧にヘラミガキし、色調も他の壺甕類と異なって彩やかで、胎土もよく精選されている。これもPo 90と同様に火に焼いた痕跡がある。Po 85～Po 88も器面を丁寧にヘラミガキするものであり、赤色塗彩する。遺物は全て埋土中よりの出土であり、B-B'土層断面に対応させると、出土レベルは第④層以上である。出土地点が確認でき且つ図化した土器に限るが、土器の出土レベルを各層に対応させると、第④層内ではPo 107、第⑥層内ではPo 24、Po 45、Po 50、第⑦層内ではPo 16、Po 20、Po 42、Po 55、Po 59、Po 62、Po 68～Po 70、Po 73、Po 92、Po 93、Po 109、Po 121、第⑧層内ではPo 12、Po 23、Po 28、Po 46、Po 61、Po 103、Po 119、第⑨層内ではPo 6、Po 11、Po 43、Po 47、Po 87、Po 120が出土し、第⑦層内での出土点数が他層でのそれを抜く。出土土器は弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものに限られる。出土土器及びその出土状況より第1号溝状遺構は弥生時代後期後半には既に存在

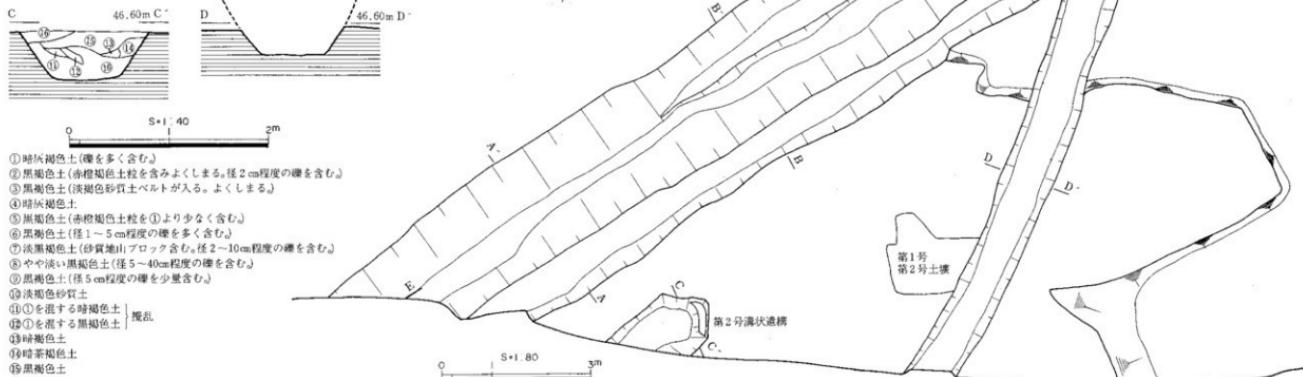
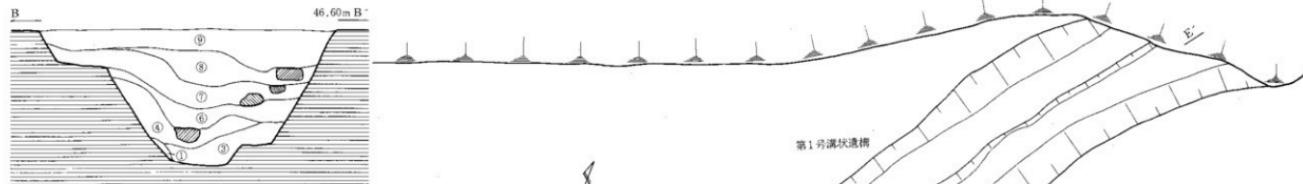
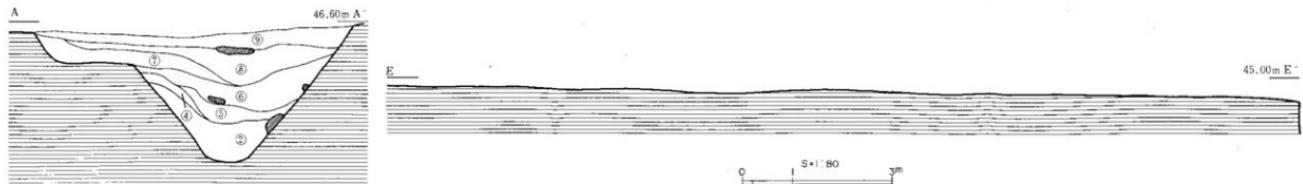


図5 第1号~第3号溝状構造測定図

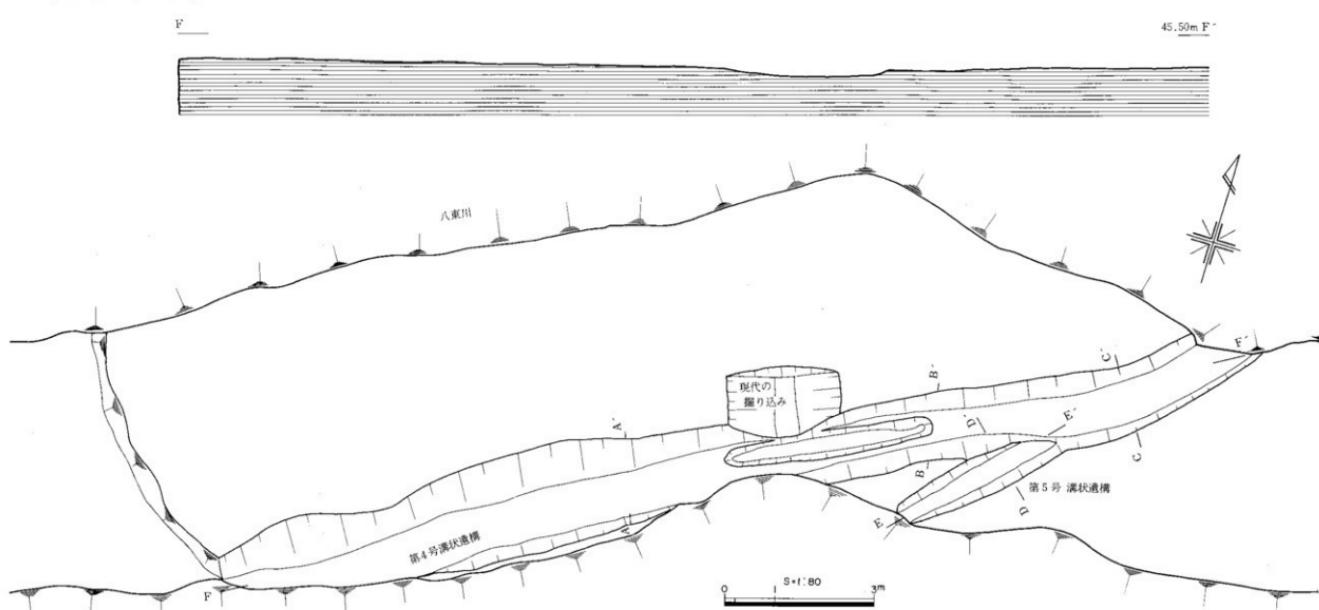
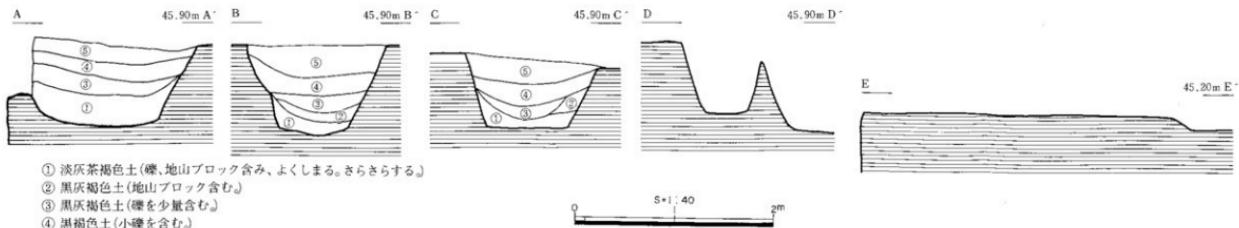


図6 第4号・第5号溝状遺構実測図

し、弥生時代末期乃至古墳時代初頭までは土砂の流入によって埋まったものであると思われ、第4号・第5号溝状遺構と同時に存在していたと考えられる。第1号溝状遺構の機能については関連遺構がないため明言できないが、P_o85～P_o90等より祭祀的なものを窺わせる。

第2号溝状遺構（挿図5、図版3）

第2号溝状遺構は、第1号溝状遺構の南東約1mのところに位置する。北東側が閉じていることから土壤である可能性も高いのであるが、南西方向が調査区外に入り、延びてゆく様相を呈するため、溝として扱う。規模は、検出面での最大幅1.3m、最大深0.5mを測る。遺物は全く出土しなかった。

第3号溝状遺構（挿図5、図版3）

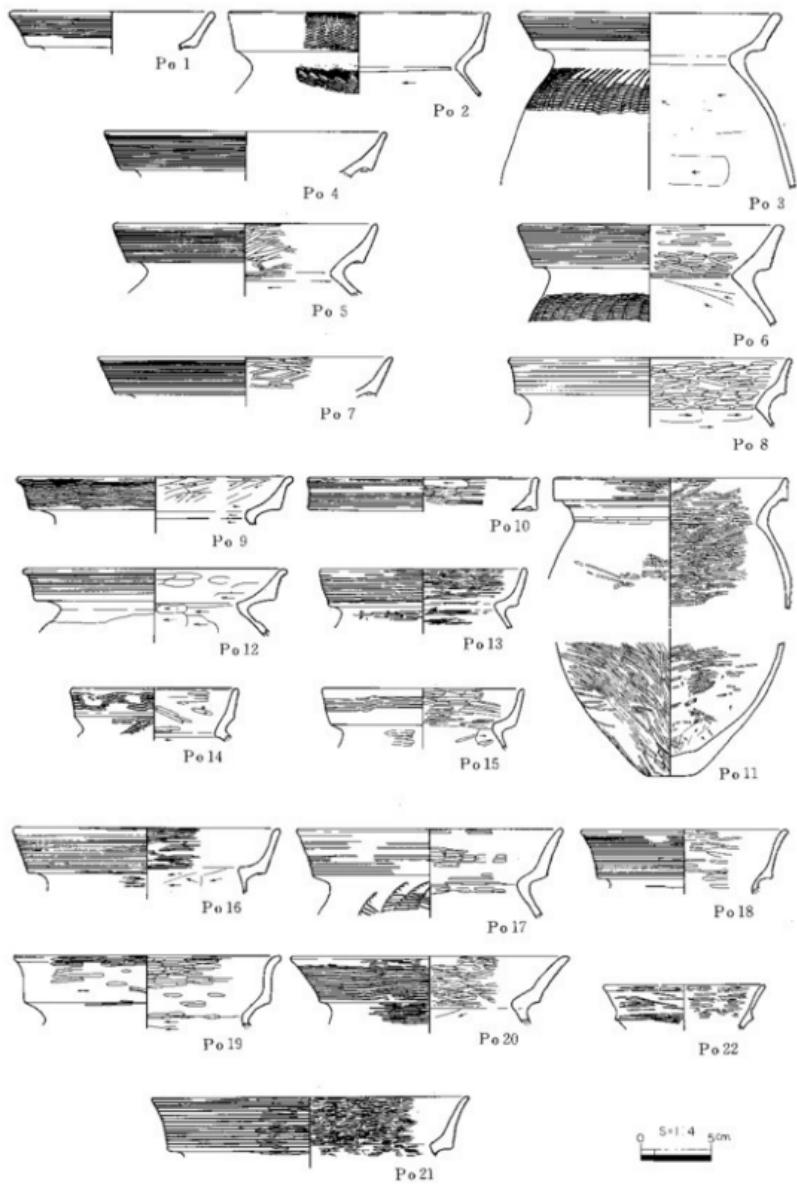
第3号溝状遺構は、第1土壤を切って、南から北へ走る溝である。表土剥ぎ段階で検出されていたのだが、埋土中にコンクリート破片が混入していたため、遺構面検出段階まで等閑に付しておいた。その段階で掘り下げたところ、埋土中より近代以降の陶器・煙管の吸口が出土した。最近作成された地割図をみると、「悪水路」として使用されていた様である。

第4号溝状遺構（挿図6、13、14、図版4、9、10）

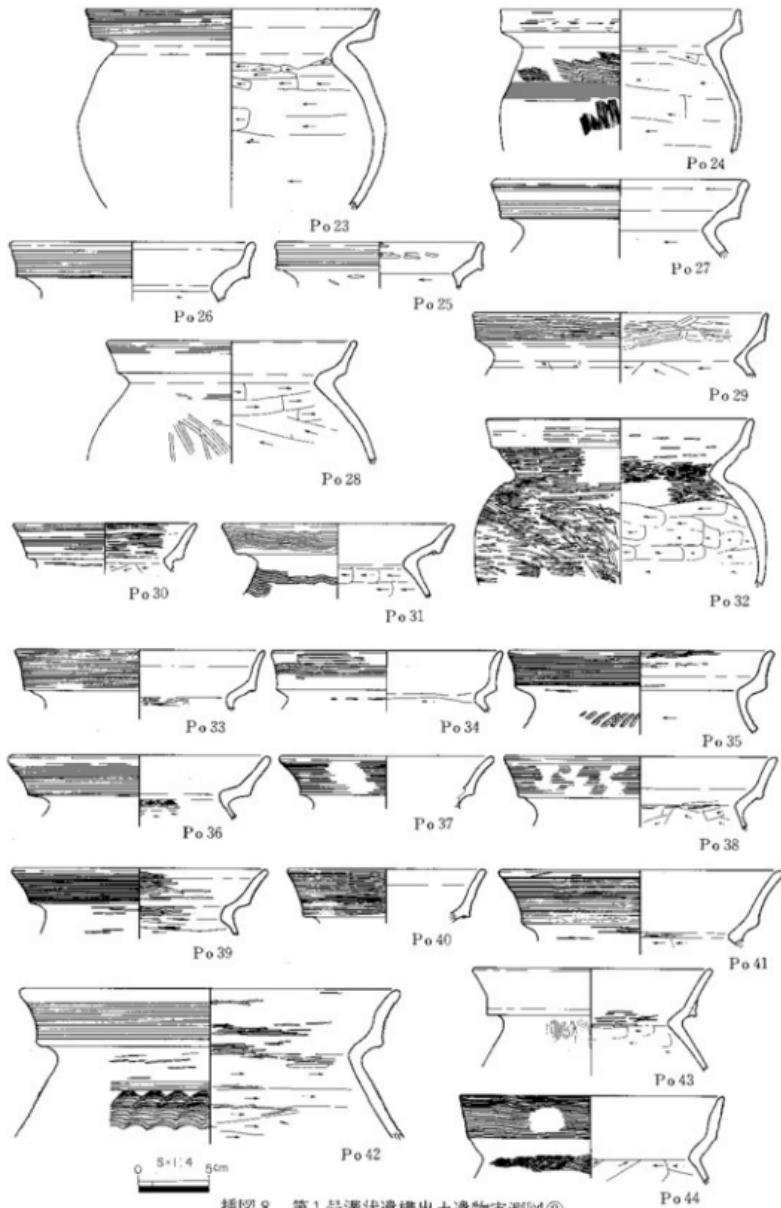
第4号溝状遺構は、奈良羅地区を縦断する様に、主軸をN-60°-Eにとって走る溝である。遺構の南東側は調査前に既に削り取られていたため、全貌を明らかにすることはできなかったが、長さ約21mにわたって確認することができた。溝はほぼ直線的に走るのであるが、北東側で北側へ曲がる様相を呈する。規模は検出面での最大幅2.1m、底面での最大幅1.0m、検出面からの最大深0.9mを測る。横断面形は逆梯形を呈す。縦断面を見ると、底面高が南西側ほど高くなっている、第1号溝状遺構と同様である。埋土は全体的に黒褐色を呈し、しまりがあまりよくないが、第①層のみよくしまり、他層と様相を異にする。本溝状遺構からは第5号溝状遺構が派生する。出土遺物の内図化できたものは、壺類P_o128～P_o151、高坏P_o152、P_o153、器台P_o154～P_o159、蓋P_o160～P_o164、鉢P_o167、低脚坏P_o166、台付の底部P_o165である。土器は第5号溝状遺構が派生する辺りで集中して出土した（図版4）。土器の出土は全て埋土中で、レベル的には第③層以上で出土し、第⑤層に集中する。出土地点が分かり、図化できた土器のみに限定すると、第③層内ではP_o129、P_o160、第④層内ではP_o131、P_o138、P_o154、P_o161、第⑤層内ではP_o147、P_o149、P_o153、P_o164が出土している。出土土器及びその出土状況より、第1号溝状遺構と同様、弥生時代後期後半には既に存在し、弥生時代末期乃至古墳時代初頭には土砂の流入によって埋まり、土器とともに放棄されたものであると考える。その機能は第1号溝状遺構と同様であると思われる。

第5号溝状遺構（挿図6、13、図版4、9）

第5号溝状遺構は、第4号溝状遺構から派生する枝溝である。主軸はN-43°-Eをとる。南西方向は既に破壊されており、長さ3.15mのみ確認することができた。規模は、検出面で最大幅0.80m、底面で0.30m、最大深0.72mを測る。埋土中より壺P_o140が出土した。第4号溝状遺構と同時期のものであると思われる。



挿図7 第1号溝状遺構出土遺物実測図①



挿図8 第1号溝状遺構出土遺物実測図②

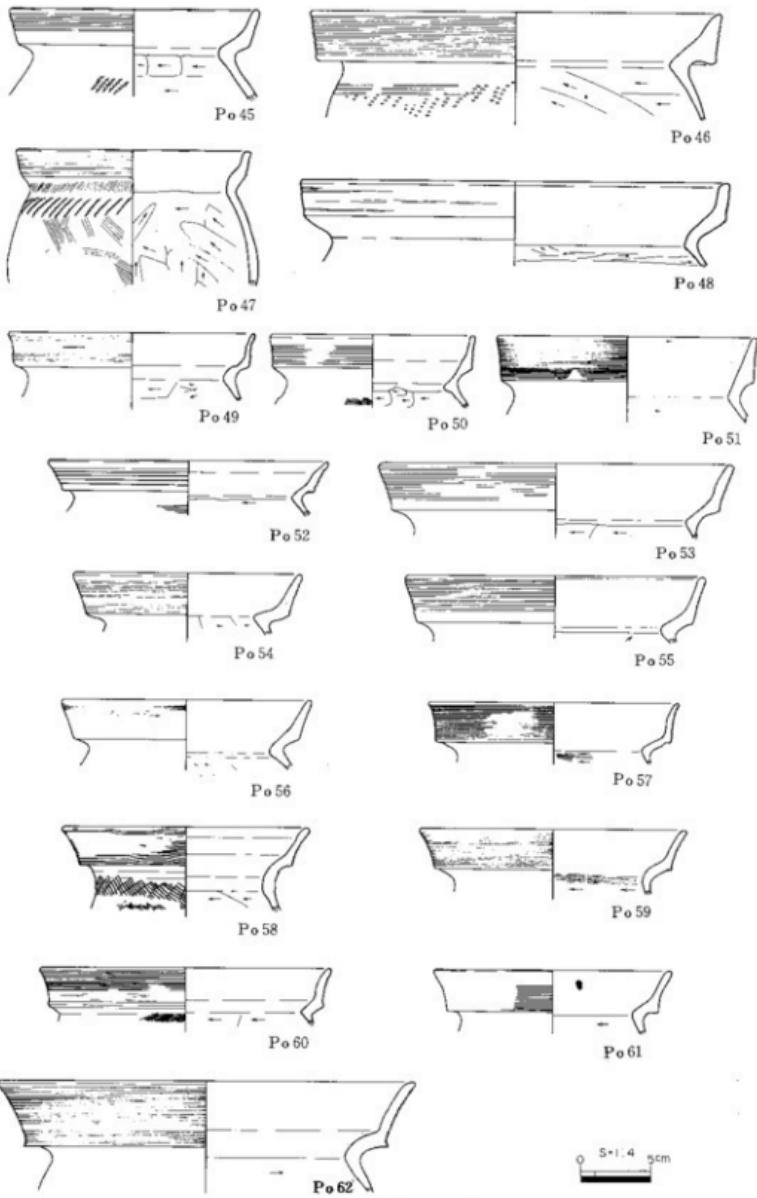
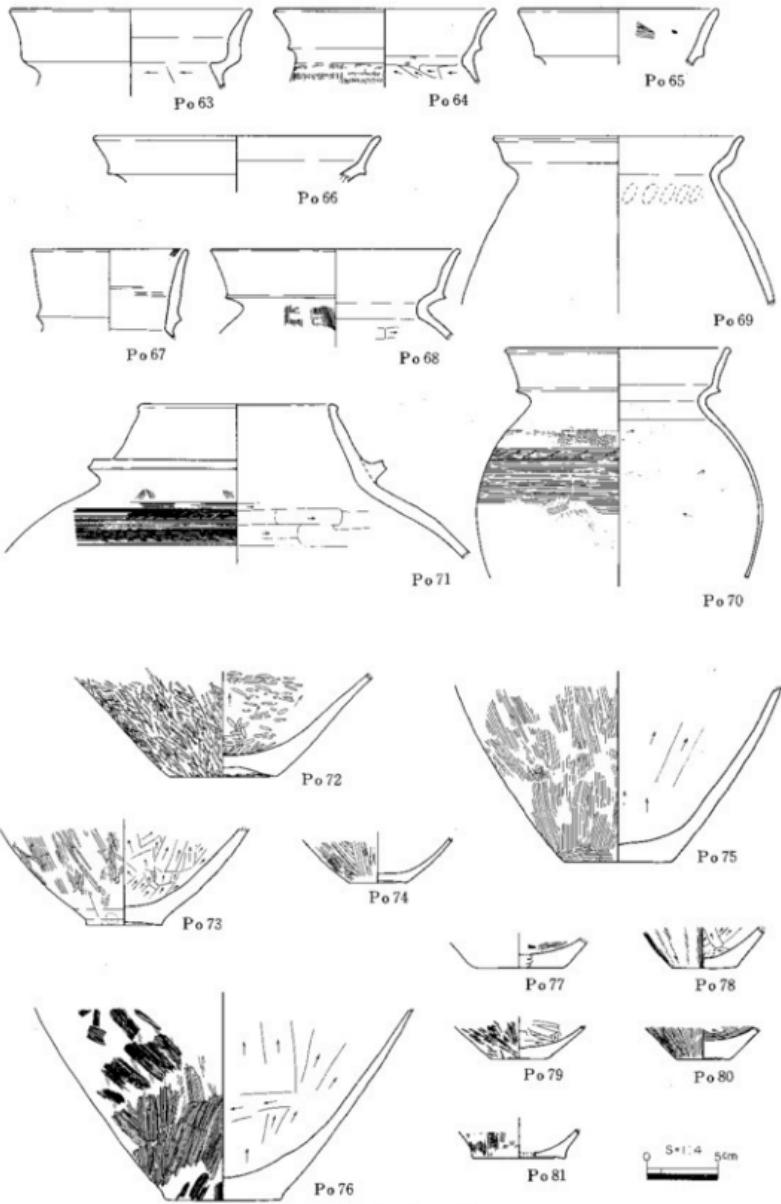


插图9 第1号溝状造出土遺物実測図③



插図10 第1号溝状遺構出土遺物実測図④

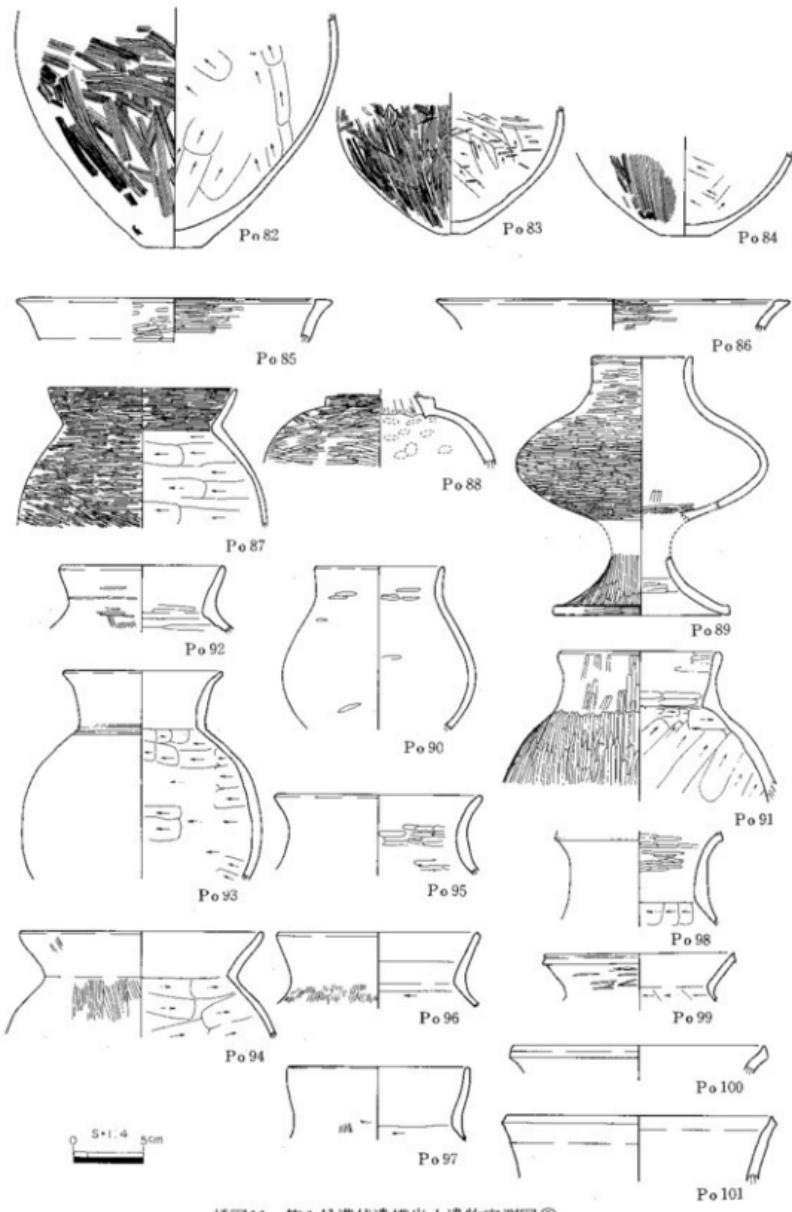


插图11 第1号溝状遺構出土遺物実測図⑤

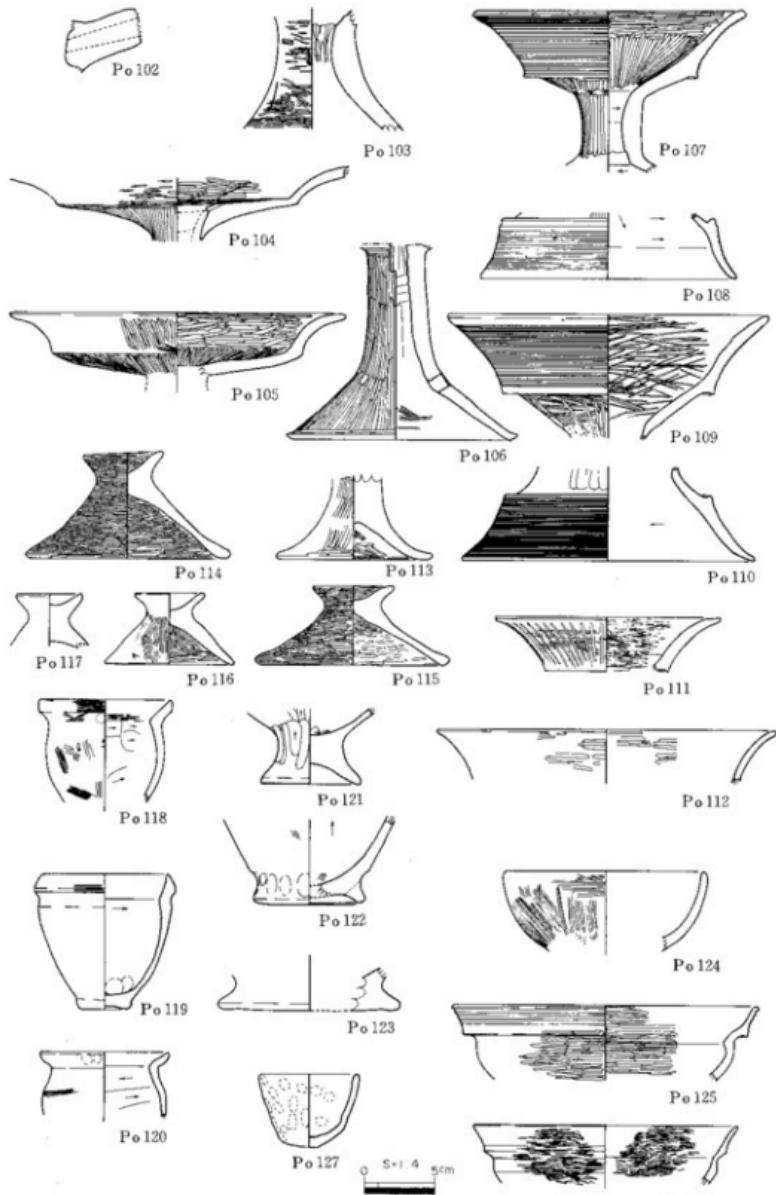
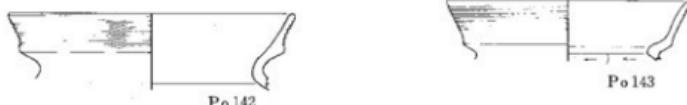
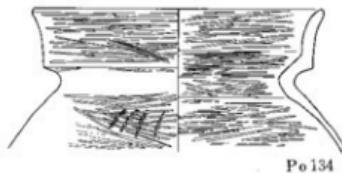
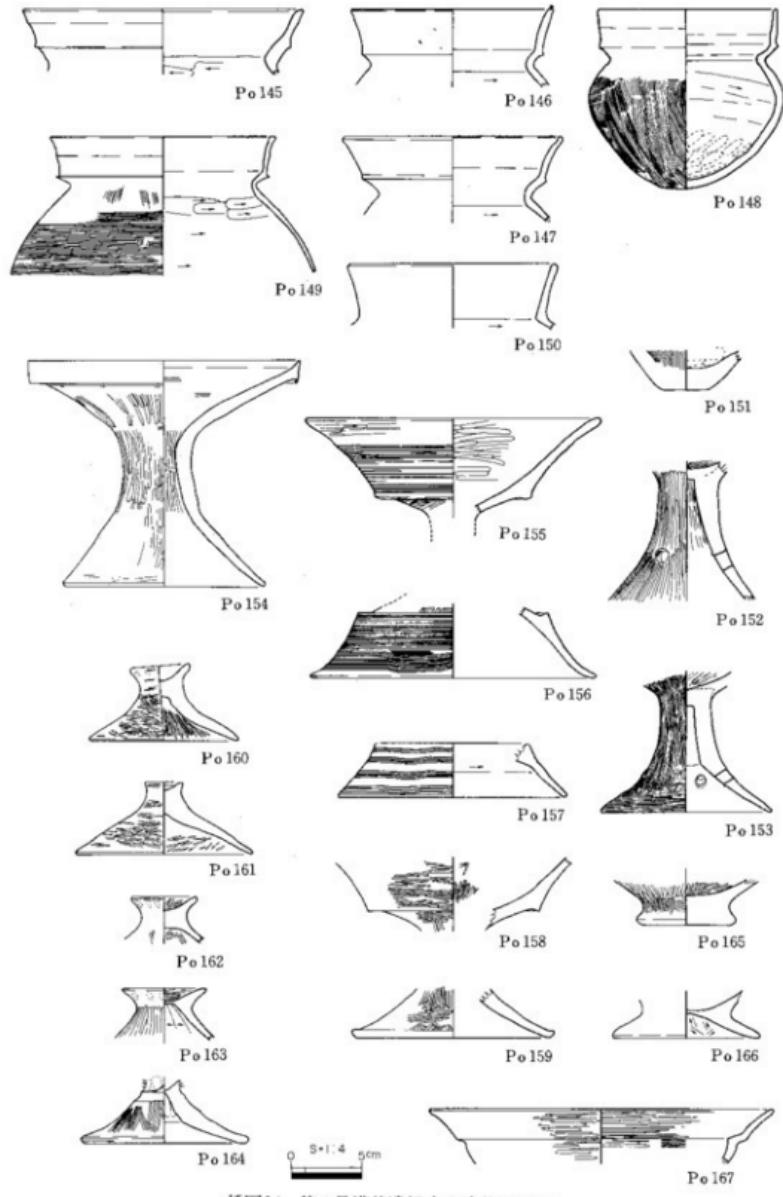


図12 第1号溝状構出土遺物実測図⑥



挿図13 第4号・第5号溝状遺構出土遺物実測図



插図14 第4号溝状構出土遺物実測図

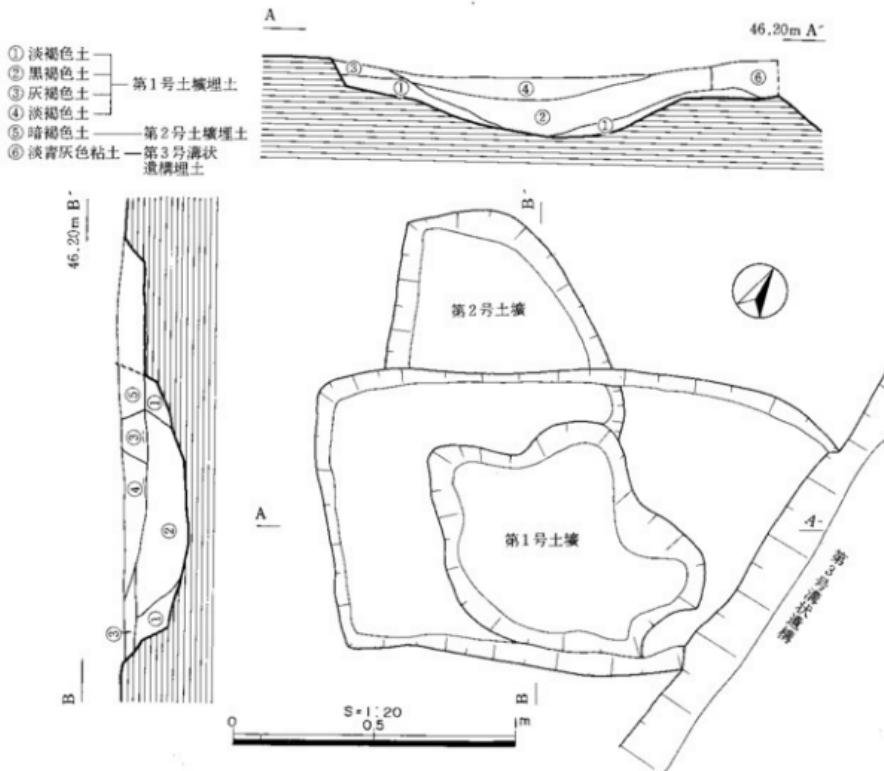
2. 土壌

第1号土壌 (挿図15、図版5)

第1号溝状遺構の南東約2mに位置する。第3号溝状遺構に北東側を、第2号土壌に北西側を切られる。規模は検出面で長軸1.8m以上、短軸1.05m以上、床面で長軸1.83m以上、短軸0.93mを測る。主軸はN-60°-Eをとる。平面形は長方形と推定され、床面上に1.09×0.82mの不定形な窪みを有する。埋土中及び周縁部より遺物は全く出土しなかった。時期、性格とも不明である。

第2号土壌 (挿図15、図版5)

第1号土壌の北西側を切って掘り込まれる。検出時、平面的に第1号土壌との切り合い関係を確認できなかったため、第1号土壌と同時に掘り下されたことから土壌の南東側を確認することはできなかった。規模は検出面で短軸0.81m、床面で短軸0.64mを測る。主軸はN-33°-Wとる。平面形は北東側が膨らむ半月形と推定される。埋土中及び周縁部より遺物は全く出土しなかった。第1号土壌同様、時期、性格とも不明である。



挿図15 第1号、第2号土壌実測図

第3号土壙

(挿図16、図版5)

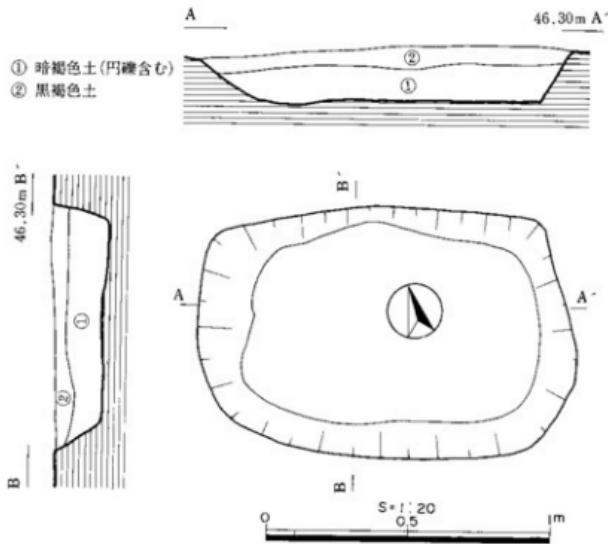
第1号土壙の西約16

m、第1号溝状造構と
第4号溝状造構がはさ
む平面に位置する。規
模は検出面で長軸1.32
m、短軸0.89m、床面
で長軸1.02m、短軸0.7
mを測る。主軸はN—
75°—Wをとる。平面形
はややいびつな隅丸長
方形を呈す。円礫を多
く含む層に掘り込まれ
ているため、床面及び
側壁は、円礫が顔をの
ぞかせ、平滑
なものではな
かった。埋土
も円礫を含む
ものであった。
埋土中及び周
縁部よりの出
土遺物はなく、
時期、性格は
不明である。

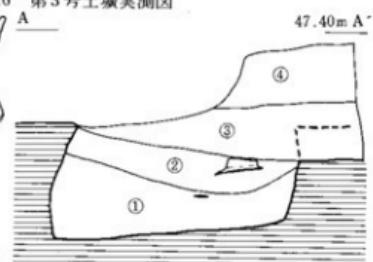
挿図17 第4号土壙出土物実測図

第4号土壙 (挿図17、18、図版5)

奈免羅古墳の石室を除去後その下面で検出され
た。第1号土壙の東約41mに位置する。平面形は
いびつな円形である。規模は検出面で0.99m×0.
81m、床面で0.88m×0.76m、最大深0.42mを測
る。埋土中より壺Po169、壺Po168が出土した。
出土遺物より、第4号土壙は弥生時代終末期のも
のと考える。造構の性格は不明である。



挿図16 第3号土壙実測図



- ① 黒褐色土(礫多く含む)
- ② 黑灰褐色土
- ③ 黑褐色土
- ④ 暗褐色土



挿図18 第4号土壙実測図

4. 奈免羅古墳（挿図19、20、図版6、12）

奈免羅古墳は調査区の東端一土器散布地として「周知の埋蔵文化財包含地」となっていた「奈免羅遺跡」の一角に位置する。奈免羅古墳の北東約1.25kmには「梨の木古墳」が存在していたが既に消滅しており、現存しない。本古墳も既に墳丘を完失し、土砂採取の際に須恵器が出土したことと大きな河原石が2個ならんでいたことから古墳と判断できたもので、調査開始時には見る影もない状態であった。残存する2個の河原石は、その大きさ（大きい方で長さ0.89m、幅0.46m、高さ0.58m）、配置及び出土遺物より、横穴式石室の腰石と考えられる。加えて、土砂採取直後には、北東側残存石の北西側に、それと直交する河原石が1個残存していたことと、土砂採取時の須恵器の出土位置（2個の残存石の北西側）を考慮に入れると、2個の残存石は側壁を構成する腰石であり、その北西側に玄室があったものと考えられる。この様に考えると、この石室は主軸をN-32°-Eにとる南西方向に開口する横穴式石室であると推定することができる。残存石の周辺を精査したところ、それを囲む様な掘り方を検出することはできなかった。石室構築法はその全貌をつかむことができないが、腰石底面大の窪みを掘り、かませ石を入れ、そこに腰石を埋め立てるという腰石の設置法のみ把握することができる。奈免羅古墳よりの出土遺物は調査時のものはなく、全て土砂採取時のものである。無蓋高杯Po 1～Po 5、壺Po 6がそれである。無蓋高杯の内、Po 1のみ脚部に透し（二方二段）を有する。Po 3、Po 5は壺部が変形していびつであり、Po 4は壺部を欠く。Po 1とPo 2～Po 5は形態的に時期差が存在すると考えられ、追葬の可能性を示唆する。出土遺物より奈免羅古墳の築造は7世紀初頭と考えられ、船岡町坂田所在の大谷平古墳（挿図3-6）の築造（挿図21-Po 1～Po 7）にやや遅れると思われる。

註1. 鳥取県埋蔵文化センター野田久男氏御教示による。

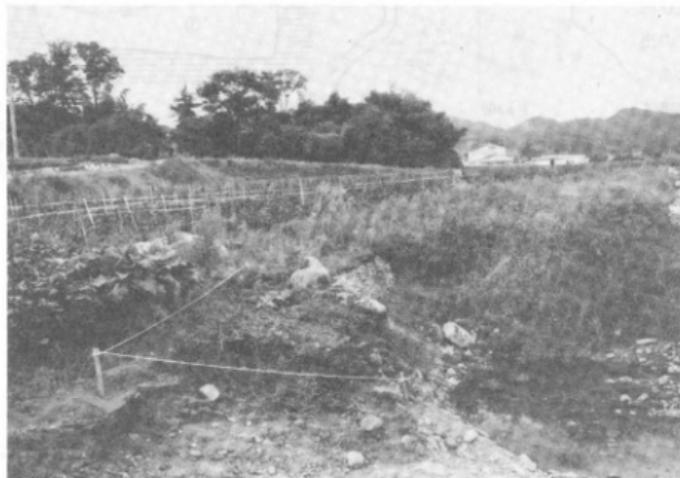
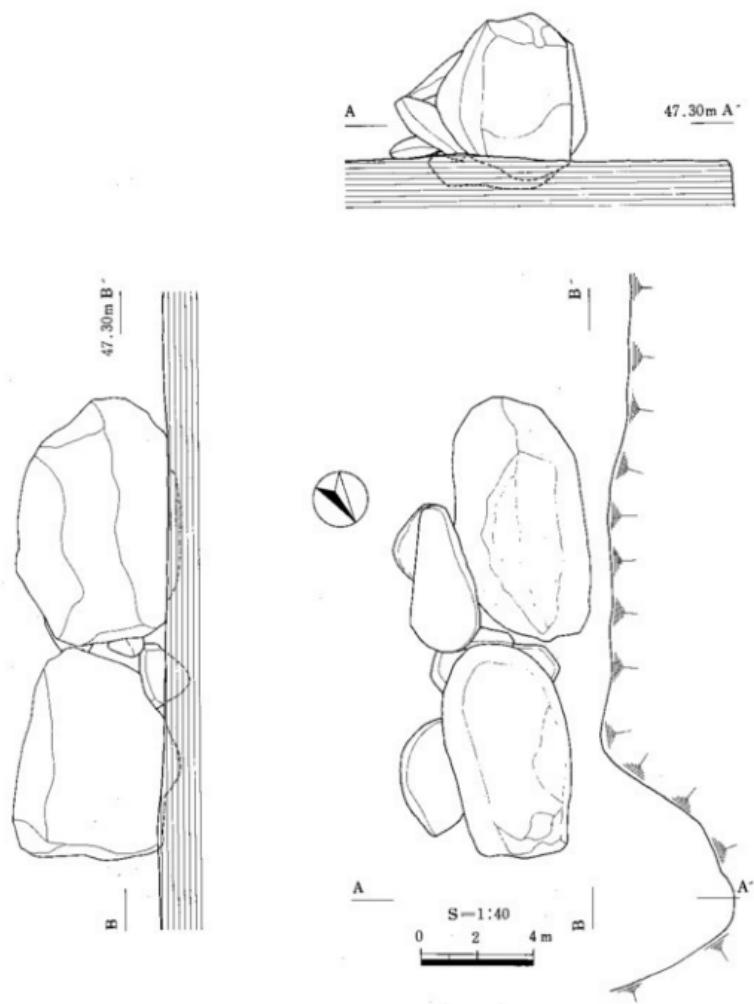
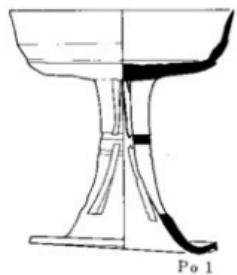


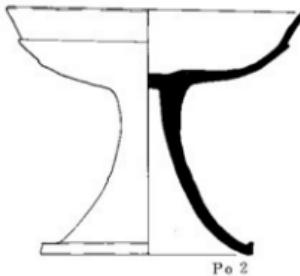
写真4 奈免羅古墳調査開始時状況



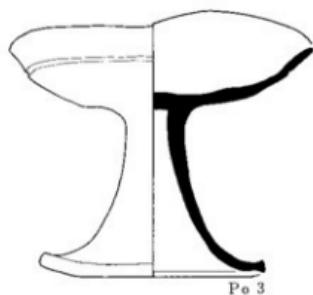
挿図19 奈免羅古墳石室残存部実測図



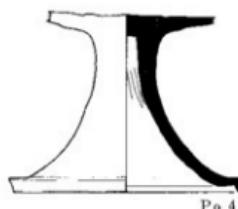
Po 1



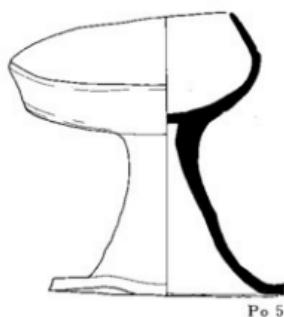
Po 2



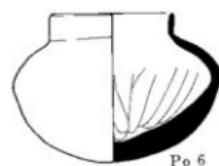
Po 3



Po 4



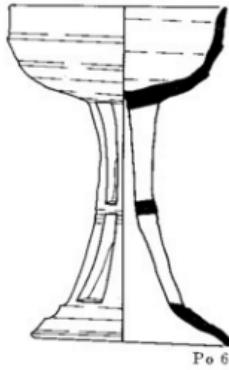
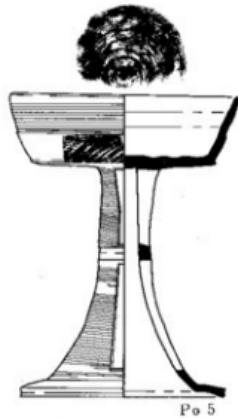
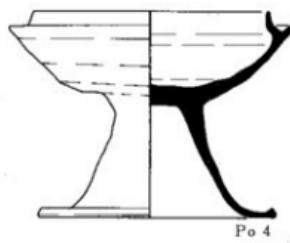
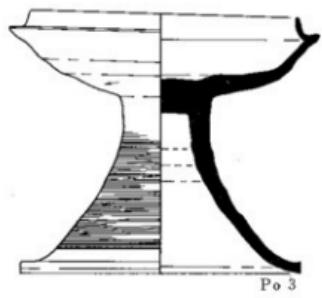
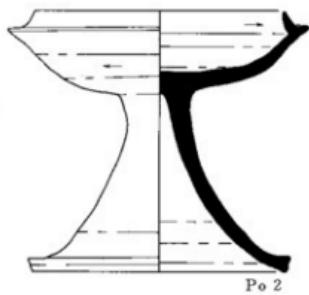
Po 5



Po 6

0 S=1:3 5cm

插図20 奈免羅古墳出土遺物実測図



0 S=1:3 5cm

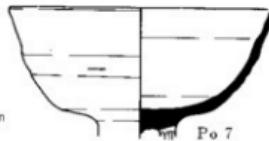


插图21 大谷平古墳出土高坏实测图

遺物番号 神戸番号 組合番号	出土遺構 名	器種	①口径(cm) ②底高 ③底径 ④最大径	形態	手法	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他の特徴
Po 1 7 7	第1号溝 状遺構	甕	①14.0(復) ②2.8(残)	外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ、下端はわずかに下彎する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、16条の平行沈線文。 内面一ヨコナデ	①密(精良) ②良好 ③外面一褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。 ④外縁にスズ付着
Po 2 7 7	第1号溝 状遺構	甕	①18.2(復) ②5.8(残)	わざかに外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。肉薄である。	外面一肩部に波状文、頭部ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外縁一褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 3 7 7	第1号溝 状遺構	甕	①17.9(復) ②12.4(残)	最大径を下位に有する胴部からならだらかな肩部につづく。口縁部は外縁で窪くたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。	外面一頭部に下位に有する胴部からならだらかな肩部につづく。口縁部によると押引沈線文。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③内外とも薄褐色。
Po 4 7 7	第1号溝 状遺構	甕	①17.8(復) ②3.3(残)	外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ、下端は下彎する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、16条の平行沈線文。 内面一口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外縁一褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 5 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.4(復) ②5.0(残)	彎曲する頭部から外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ、下端は下彎する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、16条の平行沈線文。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ後、ヨコ方向へラミガキ。口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③内外とも薄褐色。
Po 6 7 7	第1号溝 状遺構	甕	①18.3 ②7.1(残)	なだらかな肩部。外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。	外面一頭部、真腹縁(ベンケイ系)による押引沈線文。頭部、ヨコナデ。口縁部、貝による14条の平行沈線文。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③内外とも薄褐色。 ④口縁部内外面に赤茶塗装痕。
Po 7 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①20.6(復) ②2.9(残)	外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。下端は下彎する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、16条以上の平行沈線文。 内面一口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(楕円) ②良好 ③外縁一褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 8 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①19.7(復) ②4.7(残)	長めの頭部から直立気味に窪くたらあがる口縁部に至る。口縁部上端は丸くおきめ、下端は下彎する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、6条の平行沈線文。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(楕円) ②良好(堅固) ③内外とも薄褐色。 内面一淡茶褐色～暗褐色。
Po 9 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①19.2(復) ②4.4(残)	わざかに外縁して短くたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。	外面一口縁部に7条以上の平行沈線文。 内面一頭部、左方向の板状工具によるミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③内外とも薄褐色。
Po 10 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①16.1(復) ②2.4(残)	直立する複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。下端は下彎する。	外面一平行沈線文後ヨコ方向へラミガキ。 内面一ヨコ方向へラミガキ。一部に左方向の板状工具があり。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③外縁一褐色。 内面一明茶褐色。
Po 11 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①15.3(復) ②21.2(復) ③ 3.0	不安定な平底。中位に最大径をもつ複合口縁。口縁部は直立して短くたらあがる複合口縁で、上端は丸くおきめ、下端は下彎する。	外面一底部から頭部下位にかけて左方向へラミガキ。頭部中位から頭部下位にかけて上方向へラミガキ。頭部下位にヨコ方向へラミガキ。頭部中位から頭部下位にかけて左方向へラケズリ後ヨコ方向へラミガキ。口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③外縁一褐色～黒褐色。 内面一明茶褐色～黒褐色。
Po 12 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.2(復) ②5.4(残)	短くかく曲ぐる頭部から外縁してたらあがる複合口縁に至る。口縁部上端は丸くおきめ。	外面一頭部、ヨコナデ。一部強ヨコナデとし腰を飛す。口縁部、6条の平行沈線文。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外縁一褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 13 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①14.4(復) ②4.2(残)	短くかく曲ぐる頭部から外縁してたらあがる複合口縁に至る。口縁部上端は丸くおきめ。	外面一頭部、ヨコナデ。左方向へラケズリ後ヨコ方向へラミガキ。口縁部、ヨコ方向へラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③外縁一褐色。 内面一淡茶褐色。 ④口縁部外面にスズ付着。
Po 14 7 —	第1号溝 状遺構	甕	①11.6(復) ②3.8(残)	わざかに外縁してたらあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおきめ。下端はねじり出る。	外面一頭部に真腹縁(ベンケイ系)による押引沈線文。口縁部、平行沈線文後ヨコ方向へラミガキ。未貫通の穴4つ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 ヨコ方向へラミガキ。口縁部、ヨコ方向へラミガキ。未貫通の穴2つ。	①密(楕円) ②良好 ③外縁一蒸茶褐色。 内面一淡茶褐色。

插表1 第1号溝状遺構出土遺物観察表①

遺物番号 排回番号 同版番号	出土土模 状遺構	器種	①11往(cm) ②石器 ③骨器 ④貝天珠	形態	手法	参考 ①胎土 ②焼成 ③燒調 ④他の特徴
Po.15 7	第1号溝 状遺構	甌	①14.0(復) ②4.3(残)	丸かく彎曲する腹部より わざかに外傾する複合口縁。 口縁部上端は丸くおきめる。	外曲一頸部。ヨコ方向へラミガキ。 口縫部、平行沈縫文後ヨコ方向へラ ミガキ。 内面・頸部底下へラケズリ後ヨコ方 向へラミガキ。以下へラケズリ、11 縫部。ヨコ方向へラミガキ。	①南(精良) ②良好 ③外生-墨褐色。 内面-明茶褐色。
Po.16 7	第1号溝 状遺構	甌	①18.7(復) ②4.5(残)	外傾してたらあがる複合 口縁。口縁部上端は丸く おきめ。下端はわざかに 下垂する。	外曲一頸部。ヨコナデ。口縫部、11 縫部の平行沈縫文後ヨコ方向へラミガ キ。 内面・頸部以下、左方向へラケズリ 口縫部。ヨコ方向へラミガキ。	①南(精良) ②良好 ③外生-墨褐色。 内面-淡茶褐色。 ④口縫部底から11縫部にかけ てスス付着。
Po.17 7	第1号溝 状遺構	甌	①18.7(復) ②6.3(残)	外傾してたらあがる複合 口縁。口縫部上端は丸く おきめる。	外曲一頸部。貝隕痕(ベンケイ系) による押引比拵。頸部。ヨコナデ。 口縫部、平行沈縫文後ヨコ方向へラ ミガキ。 内面・頸部底下。ヨコ方向へラミガ キ。以下へラケズリ。口縫部。ヨコ 方向へラミガキ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③外生-墨褐色。 内面-淡茶褐色-暗褐色。 ④口縫部外側にスス付着。
Po.18 7	第1号溝 状遺構	甌	①14.4(復) ②4.2(残)	外反気味にたらあがる複 合口縁。口縫部上端は丸く おきめ。下端は外方へ 張り出す。肉薄はある。	外曲一頸部。ヨコ方向へラミガキ。 口縫部、平行沈縫文後ヨコ方向へラ ミガキ。後ヨコナデ。 内面-ヨコ方向へラミガキ。後ヨコ ナデ。	①南(精良) ②良好 ③内外面とも褐色。
Po.19 7	第1号溝 状遺構	甌	①19.0(復) ②5.2(残)	直立してたらあがった後 上端近くで外傾する複合 口縁。口縫部上端は丸く おきめる。	外曲一頸部。ヨコナデ。口縫部、平 行沈縫文後ヨコ方向へラミガキ。 内面・頸部底下、左方向へラケズリ。 口縫部。ヨコ方向へラミガキ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③外生-淡茶褐色。 内面-淡茶褐色。
Po.20 7	第1号溝 状遺構	甌	①19.4(復) ②4.8(残)	外反気味に大きく外傾す る複合口縁。口縫部上端 は丸くおきめる。	外曲一頸部。ヨコ方向へラミガキ。 口縫部、12条の平行沈縫文後ヨコ方 向へラミガキ。 内面・頸部以下、左方向へラケズリ。 口縫部。ヨコ方向へラミガキ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも茶褐色。 ④外側にスス付着。
Po.21 7	第1号溝 状遺構	甌	①22.4(復) ②4.1(残)	外反してたらあがる複合 口縁。口縫部上端は丸く おきめる。	外曲一平行沈縫文後、ヨコ方向へラ ミガキ。 内面-細かいヨコ方向へラミガキ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。 ④口縫部の外側にスス付着。
Po.22 7	第1号溝 状遺構	甌	①11.2(復) ②3.2(残)	外傾する複合口縁。上端 は丸くおきめ。下端は外 方へつまみ出す。	外曲一ヨコナデ後ヨコ方向へラミガ キ。 内面一紙状工具を用いたケズリ後、 ヨコ方向へラミガキ。	①南(わざかに砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.23 8 7	第1号溝 状遺構	甌	①20.5 ②14.1(残) ③21.8(制 御中位)	中位に最大径をもつ胴部 から、誤認のない前部に 連続。短かく曲がる頸部に て折り、短かく丸くある複合 口縁に接する。口縫部上 端は丸くおきめる。	外曲一胴部にかけてナダ及びヨコナデ。 口縫部、9条の平行沈縫文後ヨコナデ。 内面一頭部江左方向へラケズリ。 口縫部は一部へラケズリ後ヨコナデ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.24 8 7	第1号溝 状遺構	甌	①16.9 ②10.1(残)	などらかな底部からゆる く彎曲する頸部をもつて、 直立して丸くおきめ。下端は下 垂する。	外曲一頸部に貝隕痕(サルボウ系) による複合口縁の沈縫文。頸部。 ヨコナデ。口縫部。平行沈縫文後ヨ コナデ。 内面・頸部以下左方向へラケズリ。 口縫部。ヨコ方向へラミガキ後ヨコ ナデ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも茶褐色-暗褐色。 ④外側にスス付着。
Po.25 8	第1号溝 状遺構	甌	①14.5(復) ②3.3(残)	直立して短く丸くあ る複合口縁。口縫部上端 は丸くおきめ。下端は下 垂する。	外曲一頸部。ヨコ方向へラミガキ。 口縫部、5条の平行沈縫文後ヨコナデ。 内面一頸部江左方向へラケズリ。 ヨコ方向へラミガキ後ヨコナデ。	①南(精良) ②良好 ③外生-墨褐色-暗褐色。 内面-淡茶褐色。
Po.26 8	第1号溝 状遺構	甌	①17.0(復) ②4.2(残)	ほぼ直立してたらあがる 複合口縁。口縫部上端は 丸くおきめ。下端は下垂 する。	外曲一頸部。ヨコナデ。口縫部、6 条の平行沈縫文後ヨコナデ。 内面-頭部江左方向へラケズリ。 ヨコ方向へラミガキ後ヨコナデ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.27 8	第1号溝 状遺構	甌	①17.6(復) ②5.6(残)	彎曲する頸部から、外傾 気味に短かくたらあがる 複合口縁に接する。口縫 部上端は丸くおきめる。下端 はわざかに下垂する。	外曲一頸部。ヨコナデ。口縫部、風 化後削離するが、平行沈縫文を確認 できる。 内面-頸部江左方向へラケズリ。ヨコ 方向へラミガキ後ヨコナデ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.28 8 7	第1号溝 状遺構	甌	①17.3 ②6.7(残)	などらかな底部から短か く彎曲する頸部に接し、 外傾して短かくたらあがる 複合口縁に生る。口縫 部上端は丸くおきめる。	外曲一頭部江左。タテハケ。頭部 -頸部。ヨコナデ。口縫部、平行沈 縫文後ヨコナデ。 内面-頭部江左下方は左上方へのラケ ズリ。ヨコ方向へラミガキ後ヨコナデ。	①南(砂粒含む) ②や不良 ③外生-淡茶褐色-黒褐色。 内面-淡茶褐色。 ④頭部から11縫部にかけ、 ところどころにスス付着。

捕表2 第1号溝状遺構出土遺物観察表②

遺物番号 探査番号 回収番号	出土遺構 名	器種	①口径(cm) ②高さ ③底径 ④最大深	形態	手法	筆者 ①柏土 ②焼土 ③色葉 ④他の特徴
Po 29 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①20.6(復) ②5.0(現)	ほぼ直立してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめる。	外面一輪部、ヨコナダ。口縫部、7条の平行沈線文後ヨコナダ。 内面一板状工具によるミガキ。	①柏(砂粒含む) ②良好 ③外面一暗褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 30 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①12.8(復) ②3.2(現)	外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめる。	外面一輪部、ヘラミガキか。口縫部 平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(精良) ②良好 ③外面一淡茶褐色。 内面一淡褐色。
Po 31 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①16.2(復) ②5.3(現)	なだらかな頭部から彎曲する頭部をへて大きく外傾してたちあがる複合口縫にもる。口縫部上端は丸くおさめ、下端は下垂する。	外面一肩部、平行沈線文。頭部、ヨコナダ。口縫部、6条の平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①やや粗 ②良好 ③外面一茶褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 32 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.7 ②11.6(現) ③20.1(頭 部上位)	口縫に最大抜きをもつ頭部から佛り気味の肩部につづく。頭部は丸く彎曲し外方へ開き口縫部に至る。口縫部上端はアセントに欠ける複合口縫。直立気味に立ちあがり。下端を丸くおさめる。	外面一頭部から口縫部直下までヨコ方向を主とした絞かいヘラミガキ。 口縫部、平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部は肩部上位まで左方向へラケズリ。頭部、ヨコ方向の縦かいヘラミガキ。 口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも明褐色。
Po 33 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①17.4(復) ②4.3(現)	わざかに外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめ、下端は下垂する。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、17条の平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部は下に板状工具痕。口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒含む) ②良好 ③外面一茶褐色。
Po 34 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①16.2(復) ②4.3(現)	短く彎曲する頭部からわざかに外反して直立する複合口縫にもる。口縫部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一輪部、ヨコナダ。口縫部、平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部は下、左方向へラケズリ。 口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒わずかに含む) ②良好 ③外面一淡茶褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 35 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.4(復) ②5.6(現)	ゆるやかに横曲する頭部から直立気味にわざかに外反しながらたちあがる複合口縫に至る。口縫部上端は丸くおさめ、下端はわざかに外方に張り出す。	外面一頭部、ヨコナダ。頭部、口縫部、12条以上の平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③内外面とも淡茶褐色。
Po 36 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.1(復) ②5.0(現)	短く彎曲する頭部から大きくなりながらたちあがる複合口縫に至る。口縫部上端はわざかに半抜部を有する。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、10条の平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、ハク形状工具。以降外方へラケズリ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①(砂粒含む) ②良好 ③外方一茶褐色。
Po 37 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①14.9(復) ②3.7(現)	外反味に外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒わずかに含む) ②やや不良 ③外面一茶褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 38 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①19.1(復) ②5.0(現)	外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめ、下端は丸くおさめに下垂する。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部は下に板状工具痕。以下外方へラケズリ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒わずかに含む) ②やや不良 ③外面一茶褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 39 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①17.8(復) ②4.6(現)	ゆるやかに彎曲する頭部に大きくなりながらたちあがる複合口縫つく。口縫部上端は丸くおさめ。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平行沈線文後ヨコナダ。 内面一頭部は下以下左方向へラケズリ。 頭部下位に口縫部にかけてヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①柏(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも褐色。
Po 40 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①13.8(復) ②3.8(現)	わざかに外反味に外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめ、下端は外方へわざかに張り出す。	外面一頭部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。 口縫部、16条の平行沈線文後上位ヨコナダ。	①柏(砂粒含む) ②良好(堅固) ③内外面とも暗茶褐色。
Po 41 8 —	第1号溝 状遺構	甕	①19.8(復) ②5.4(現)	外反しながら大きくなり外傾してたちあがる複合口縫。口縫部上端は丸くおさめ、下端は下垂する。	外面一頭部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。 口縫部、ヘラミガキ後ヨコナダ。	①柏(精良) ②良好 ③外面一茶褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。

表3 第1号溝状遺構出土遺物観察表③

遺物番号 種別番号 出土地番号	出土遺構 状態	器種	①口径(cm) ②高さ ③底径 ④最大径	形態	手法	備考
Po 42 8 —	第1号溝 状態	甕	①26.6(復) ②15.0(残)	なだらかな肩部。外反 してちあがる複合口縫。 口縫部上端は丸くおきめ、 下端は外方へ張る。	外面一肩部に、口縫部（ベンケイ系） による押引沈縮文及び3条の平行抜 線文。頭部、ヨコナダ。口縫部、平 行沈縮文後ヨコナダ。	①市（砂粒含む） ②良好 ③外面一淡褐色～暗褐色。 内面一淡褐色。 ④口縫部内面に赤色地彩刷。
Po 43 8 7	第1号溝 状態	甕	①16.7(復) ②7.2(残)	なだらかな肩部から、外 反気味にちあがる複合 口縫部に至る。口縫部上端 は丸くおきめ、下端は粘 土をはりつけることによ って、下端気味に外方へ 張り出せる。	外面一肩部、タテハケ後ヨコナダ。 瓶部、ヨコナダ。口縫部、頭によ る平行沈縮文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縫部蓋子部、ヨコ方向へラミガキ、 他はヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①市（純良） ②良好 ③外面 淡褐色～黒褐色。 内面 淡褐色～淡茶褐色。
Po 44 8 —	第1号溝 状態	甕	①18.6(復) ②5.8(残)	ゆるく膨らむ頭部に、外 方に押出する複合口縫 がつづく。口縫部上端は 先端が氣味で、下端はア クセントが鋭い。	外面一頭部から頸部、眞理縫（ベン ケイ系）による押引沈縮文。頭部、 ヨコナダ。口縫部、平行沈縮文後ヨ コナダ。	①市（砂粒含む） ②良好 ③外面一褐色～黒褐色。 内面一褐色。 ④外面部縫部にスス付着。
Po 45 9 7	第1号溝 状態	甕	①17.4 ②6.2(残)	なだらかな肩部から頸部 で壁間に複数部に至る。 口縫部はわずかに外側気 味にちあがり、上端を 丸くおきめる。	外面一頭部に、右上方へラケズリ 及び左方向へラケズリ。口縫部、 ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①市（砂粒含む） ②やや不良 ③外面一黒褐色～淡褐色。 内面一淡褐色。 ④外面部縫部から頸部にかけ てスス付着。
Po 46 9 7	第1号溝 状態	甕	①28.6(復) ②7.6(残)	なだらかな肩部から短か く膨らむ複数部につづく がば直立してちあがる複 合口縫部に至る。口縫部 上端は先端が鋭く、下端 は下垂する。	外面一頭部、平行沈縮文後ヨコナダ 後貝による押圧文。頸部、ヨコナダ。 口縫部、平行沈縮文後ヨコナダ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縫部、ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③外面部とも淡明茶褐色。 ④口縫部外一部にスス付 着。
Po 47 9 —	第1号溝 状態	甕	①16.0(復) ②9.6(残) ③17.7(頭 部中位)	中位に最大径をもつ頭 の小さい肩部から張りの ない肩部に至る。アカセ ントの少ない頸部に至り て直立気味のアカセントの ない短かくちあがる複 合口縫部がつづく。口縫部上 端は平型直角を有する。	外面一頭部、ハケメ後ナダ。肩部、 眞理縫（サルボウ系）による押圧文。 頸部、タテハケ後ヨコナダ。口縫部、 頭による5条の平行沈縮文後ヨコナ ダ。	①市（精良） ②良好 ③外一面褐色。 内面一褐色。 ④外面部にスス付着。
Po 48 9 7	第1号溝 状態	甕	①30.0(復) ②5.8(残)	膨らむ頭部から立ち てちあがる複合口縫に 至る。口縫部上端は丸く おきめる。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平 行沈縮文後ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③内外面とも褐色。
Po 49 9 —	第1号溝 状態	甕	①17.3(復) ②4.6(残)	わざかに反し、ほぼ直 してちあがる複合口縫。 口縫部上端は丸くお きめる。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平 行沈縮文後ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③外一面褐色～褐色。 内面一褐色。 ④外面部縫部から口縫部にかけ てスス付着。
Po 50 9 —	第1号溝 状態	甕	①14.2(復) ②5.0(残)	ほぼ直立してちあがる 複合口縫。口縫部上端は 丸くおきめ、内面は膨曲 部をもたない。	外面一頭部、貝による押引沈縮文。 頭部、ヨコナダ。口縫部、平行沈縮 文後ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③外一面茶褐色。 内面一褐色。 ④頭部・口縫部外にスス 付着。
Po 51 9 —	第1号溝 状態	甕	①18.1(復) ②5.6(残)	ほぼ直立してちあがる 複合口縫。口縫部上端は 丸くおきめ、内面は膨曲 部をもたない。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、23 条の平行沈縮文。	①市（砂粒含む） ②良好 ③外一面灰褐色～黒褐色。 内面一淡茶褐色。 ④外面部縫部にスス付着。
Po 52 9 —	第1号溝 状態	甕	①18.6(復) ②4.0(残)	大きく外傾する複合口縫。 口縫部上端は丸くおきめ 下端は下垂する。	外面一頭部、平行沈縮文。頭部、ヨ コナダ。口縫部、5条の平行沈縮文 後ヨコナダ。	①やや粗 ②やや不良 ③外一面褐色。 内面一褐色。 ④頭部・口縫部外にスス付着。
Po 53 9 —	第1号溝 状態	甕	①24.6(復) ②5.3(残)	外傾してちあがる複合 口縫部。口縫部上端はわざ かに平型直角を有し、下端 は外方へ張り出す。	外面一頭部、ヨコナダ。口縫部、平 行沈縮文後ヨコナダ。	①市（砂粒わざかに含む） ②良好 ③外一面褐色。 内面一淡茶褐色～褐色。 ④外面部縫部から口縫部にかけ てスス付着。

表4 第1号溝状遺構出土遺物観察表④

遺物番号 特徴番号 図版番号	出土場所	器種	①口径(cm) ②器高 ③底径 ④最大径	形態	手法	備考
Po 54 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①15.8(復) ②4.2(残)	外側する複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①砂土 ②残成 ③色調 ④その他の特徴
Po 55 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①26.1(復) ②4.7(残)	外側突出にたちあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、8 条の平行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒を少し含む) ②良好 ③外面 淡茶褐色。 内面 淡茶褐色~淡灰褐色。 ④風化が進んでいる。
Po 56 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①17.4(復) ②4.5(残)	短かく増曲する頭部から外側してたちあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	○密(砂粒を含む) ②やや不良 ③内外面とも淡茶褐色。 ④外側、口縁部頭部にスス付着。
Po 57 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①17.6(復) ②4.2(残)	わずかに外反し、ほぼ直立してたちあがる複合口縁。口縁部上端は先振り気味、下端は下斬する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、16 条以上の平行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部、ヘラギサギ後ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外面 淡褐色~黒褐色。 内面 淡褐色。 ④外面口縁部にスス付着。
Po 58 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①17.2(復) ②5.8(残)	長めの頭部から外反気味で大きく聞く複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外面一頭部から頭部にかけて、直横 條より上の平行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部、平行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下左方向へラケズリ。 頭部から口縁部にかけてヨコナデ。	①砂粒含む ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po 59 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①18.7(復) ②4.5(残)	わずかに外反して外傾する複合口縁。口縁部上端は丸くおさめ、下端はわざかに下斬する。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①砂粒含む ②良好 ③外面 淡褐色~緑色。 内面 淡茶褐色。
Po 60 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①20.4(復) ②3.8(残)	短かく増曲する頭部に外反気味にねじかくたちあがる複合口縁がつづく。口縁部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(わざかに砂粒含む) ②良好 ③内外面とも褐色。
Po 61 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①16.5(復) ②10.3(残)	わずかに外反気味に外傾してたちあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外側一暗褐色。 内面一淡茶褐色。 ④口縁部外面にスス付着。
Po 62 9 —	第1号溝 状遺構	甕	①19.6(復) ②7.9(残)	だらかなか頭部。口縁部は外反して大きくねじかくたちあがる複合口縁で、上端は外方へ向って先振り気味、下端は外方へ張り出す。	外面一頭部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈文後ヨコナデ。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①やや粗 ②やや不良 ③内外面とも淡茶褐色。 ④頭部外面にスス付着。
Po 63 10 —	第1号溝 状遺構	甕	①16.8(復) ②5.4(残)	直立してたちあがった後、やや内傾する複合口縁。口縁部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一ヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(糧食) ②不良 ③内外面とも淡茶褐色。 ④外側にスス付着。
Po 64 10 —	第1号溝 状遺構	甕	①15.4(復) ②5.2(残)	アクリストのない頭部から短かく外反気味にねじかくたちあがる複合口縁がある。口縁部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一頭部下段、タテハケ後ヨコナ デ。以上はヨコナデ。 内面一頭部以下、左方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒を少し含む) ②良好(堅厚) ③外側 淡褐色~黒褐色。 内面 淡茶褐色。
Po 65 10 —	第1号溝 状遺構	甕	①14.0(復) ②4.0(残)	外側する複合口縁。口縁部上端は丸くおさめ、下端は外方へ張り出す。	外面一ヨコナデ。 内面一ヨコハケ後ヨコナデ。	①密(精良) ②良好 ③内外面とも褐色~灰褐色。
Po 66 10 —	第1号溝 状遺構	甕	①20.0(復) ②3.3(残)	外側する複合口縁。口縁部上端は外方へ絞つてしまふ出し、下端は丸くおさめる。	外側面ともヨコナデ。	①密(砂粒わずかに含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 67 10 —	第1号溝 状遺構	甕	①11.1(復) ②6.3(残)	わずかに外傾してたちあがる口縁。口縁部上端は丸くおさめ、下端は外方へつまみ出す。	外面一ヨコナデ。 内面一ハケ後ヨコナデ。	①密(砂粒を少し含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 68 10 7	第1号溝 状遺構	甕	①17.5(復) ②6.1(残)	短かく増曲する頭部から複合口縁にある。口縁部上端はわざかに平坦面をもち、下端は外方へ偏くつまみ出す。	外面一頭部から頭部にかけてタテハ ケ後ヨコナデ。口縁部、ヨコナデ。 内面一頭部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナデ。	①密(砂粒をわざかに含む) ②良好 ③内側一淡褐色。 内面一淡茶褐色。 ④外側口縁部にスス付着。

挿表5 第1号溝状遺構出土遺物観察表⑤

遺物番号 排図番号 回版番号	出土場所	器種	①口徑(cm) ②高さ ③底径 ④最大径	形態	手法	備考 ①柄 ②地紋 ③色調 ④他の特徴
Po69 10 7	第1号溝 状遺構	甕	①17.4(底) ②11.9(残)	下位に最大径をもつ脚部に にだらかな肩部が続く。 口縁部はアクリセントのな い外縁する複合1型。口 縁部上端は外方へ曲げ丸 くおさめる。	外面一風化著しく不明。 内面一頸部に指わきえ。他は風化著 しく不明。	①柄(精良) ②良好 ③内外面とも淡褐色。 ④脚部、口縁部外側にヌヌ 付着。
Po70 10 ?	第1号溝 状遺構	甕	①15.2(底) ②16.2(残) ③20.2(腹) ④脚部中位	瓶状に近い脚部からきだ らかに肩部に続く。 口縁部は外縁する複合1型。 上端は外方に張り出 して縁をもつ。下端は 外方に撇くつまみ出す。	外面一脚部から口部にかけてタテハ ケ後ヨコハケ。肩部には横状工片に よる刺突文をめぐらす。目前上位から 頸部にかけてタテハケ後ヨコナダ。 口縁部、ヨコナダ。 内面一胸部中位以降左方向へラケズ リ。脚部上位から底部下位にかけて 右方向へラケズリ。頭部下位から頸 部上位はヘラケズリ後ヨコナダ。口 縁部、ヨコナダ。	①柄(細かい砂粒含む) ②良好 ③内外面とも暗褐色。
Po71 10 7	第1号溝 状遺構	甕	①13.3(底) ②10.9(残) ③底高1.3	よく張る肩部から、肚 につけ凸部を有する腹部に つき、そのまま内縮し て口縁部上端に至る。口 縁部上端はわずかに外方 へ張り出して縁をもつ。	外面一肩部、ヨコハケ後平行沈痕文 その後ヨコナダし、横柱文をめぐら す。頸部下位、タテハケ後平行沈痕文 その後ヨコナダ。口縁部、ヨコ ナダ。 内面一頸部以下、右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナダ。	①柄(細粒含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po72 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 9.5(残) ③ 7.6	中央がもちあがる平底。	外面一タテハケ後タテ方向の根いへ ラミガキ。底面にもヘラミガキが認 められる。 内面一上方向へのラケズリ後、頗 いヘラミガキ。	①やや粗 ②良好 ③内外面とも淡褐色～暗褐 色。
Po73 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 6.8(残) ③ 5.4(底)	中央がわざかにもちあが る平底。	外面一タテハケ後根いへラミガキ。 内面一ナダ。	①柄(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po74 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 3.0(残) ③ 4.1(底)	中央がわざかにもちあが る平底の底部。	外面一タナハケ。底面、ナダ。 内面一不明。	①柄(精良) ②良好 ③内外面とも淡褐色～黒褐色。 ④外側にヌヌ付着。
Po75 10 —	第1号溝 状遺構	底部	②12.4(底) ③ 7.5	しっかりした平底の底部。	外面一底面、ハケ。底部以下ヨコハ ケ以上、タテハケ。 内面一上方向へラケズリ。	①やや粗 ②やや不出 ③内外面とも淡褐色。
Po76 10 8	第1号溝 状遺構	底部	②13.5(残) ③ 8.3	平底。	外面一タテハケ後タテ方向へラミガ キ。 内面一上方向へラケズリ及び左方向 へラケズリ。	①柄(砂粒含む) ②良好 ③外側、底面。 内面一淡褐色。
Po77 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 1.8(残) ③ 6.2(底)	しっかりした平底の底部。	外面一不明 内面一ハケ	①柄(砂粒わざかに含む) ②良好 ③外側、底面。 内面一暗褐色。
Po78 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 2.9(残) ③ 4.6(底)	平底の底部。	外面一底面不定方向ハケ。他。タテ ハケ。 内面一右上方向及び左上方向へラケ ズリ。	①柄(砂粒含む) ②良好 ③外側、底面。 内面一暗褐色。 ④外側にスヌ付着。
Po79 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 2.2(残) ③ 3.9	平底の底部。	外面一根いへラミガキ。底面、ナダ。 内面一左方向及び左上方向へラケズリ。	①柄(砂粒含む) ②良好、堅硬 ③外側、底面。 内面一淡褐色～暗褐色。 内面一黒褐色。
Po80 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 2.4(残) ③ 3.8(底)	平底の底部。底面中央が わざかにもちあがる。	外面一底面ハケ。他タテハケ。 内面一ヘラケズリ後不定方向ハケ。	①柄(砂粒わざかに含む) ②良好(堅硬) ③外側、底面。 内面一黒褐色～黒褐色。 ④外側にスヌ付着。
Po81 10 —	第1号溝 状遺構	底部	② 1.8(残) ③ 6.6(底)	中央がわざかにもちあが る平底の底部。	外面一タテハケ。底面、ナダ。 内面一不明。	①柄(砂粒含む) ②良好 ③外側、底面。 内面一淡褐色。
Po82 11 8	第1号溝 状遺構	底部	②16.7(残) ③ 3.8 ④22.9(底)	不安定な平底を有する。	外面一タテハケ。 内面一右上方向へラケズリ。左上方 へラケズリ。	①やや粗 ②良好 ③外側、底面。 内面一淡褐色～暗褐色。 ④外側にスヌ付着。
Po83 11 —	第1号溝 状遺構	底部	② 9.0(残) ③ 1.8	不安定な平底。	外面一タテハケ後根いへラミガキ。 内面一左上方向へラケズリ後根いへ ラミガキ。	①柄(わざかに砂粒含む) ②良好(堅硬) ③内外面とも淡褐色～黒褐色。

排表6 第1号溝状遺構出土遺物観察表⑥

遺物番号 特徴(番号) 図版番号	出土場所 機械	器種	(1)径(㎜) (2)高 (3)底径 (4)最大径	形態	手法	備考
Po 84 11 —	第1号溝 状遺構	底部	(2) 5.8(残) (3) 3.5	不安定な平底の底部	外面—タテハケ。 内面—左上方向及び右上方向へラケズリ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外面—褐色～黒褐色。 内面—茶褐色。
Po 85 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)22.4(復) (2) 3.2(残)	縁部が左右に肥厚し平坦面を有する口縁。	内外面、ヨコ方向へラミガキ。	①密(純白) ②良好(堅固) ③内外面とも淡褐色。
Po 86 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)24.5(復) (2) 2.2(残)	外方に聞く口縁。口縁部は左右に肥厚し、平坦面を有する。	外面 ヨコナデ。 内面—ヨコ方向へラミガキ。口縁部の半周面に一列の凹線。	①密(精良) ②良好(堅固) ③内外面とも淡褐色。 ④外外面に茶色斑痕。
Po 87 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)12.1(復) (2) 9.6(残)	中に最大径をもつと思われる底部からなだらかな肩部につづき、「く」の字型に曲がる腹部をもつ。そのまま外傾してたるあがる単純口縁である。口縁部上端は先細る。	外面—ヨコ方向の細かいヘラミガキ。 内面—脚部以下、左方向へラミガキ。 口縫部、ヨコ方向の細かいヘラミガキ。	①密(精良) ②良好(堅固) ③内外面とも淡褐色。 内面—黒褐色。
Po 88 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(2) 5.2(残)	よく張る底部から張り気味の肩部につづき、段を有する単純部に至る。	外面—ヨコ方向のていねいなヘラミガキ。 内面—肩部以下、ナデ、及び指おさめる。脚部、タテ方向の指カズラ。	①密(精良) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 89 11 8	第1号溝 状遺構	脚付蓋	(1) 7.0(復) (2) 12.3(復) (3) 12.1(復) (4) 17.7(復) 底部下辺	「ハ」の字状に聞く脚部。脚部は重壁式形によく見える。口縁部は直立してたるあがり、上端を丸くおさめる。	外面—脚部、脚部ヨコ方向へラミガキ。 内面—トテ方向へラミガキ。底部は10mmまでヨコ方向のていねいなヘラミガキ。 内面—脚部、ヘラケズリ後ヨコナ、一部ヨコ方向へラミガキ。底部にヘラミガキ。脚部—脚部、不明顯部へヨコ方向へラミガキが認められる。	①密(精良) ②良好 ③内外面とも明褐色。
Po 90 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1) 9.0 (2) 11.6(残) (4) 13.7(脚 部下辺)	下位に最大径をもつ脚部からなだらかな肩部へつづく。口縁部は直立してたるあがり、上端を丸くおさめる。	外面—ヨコ方向のていねいなヘラミガキ。 内面—ヘラミガキ。	①密(わざかに砂粒含む) ②良好 ③外面—赤色 ④内外面とも淡褐色。
Po 91 11 —	第1号溝 状遺構	直口蓋	(1)11.0(復) (2) 10.7(残)	下位に最大径をもつと思われる脚部からなだらかな肩部につづく。口縁部は直立してたるあがり、上端を丸くおさめる。	外面—タテハケ後タテ方向へラミガキ。 内面—頭部底面、右方向へラケズリ。 内面—頭部以下、左(?)方向へラケズリ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ。	①やや粗 ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 92 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)11.3(復) (2) 4.7(残)	外傾する単純口縁。脚部は丸くおさめる。	外面—頭部、タテハケ。頭部、ヨコナデ。口縫部、ヨコナデ。(光沢をもつ)。 内面—頭部以下、左方向へラケズリ。口縫部、ヨコナデ。	①密(精良) ②良好(堅固) ③外面—黒褐色。 内面—茶褐色～褐色。
Po 93 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)10.1 (2) 14.9(復) (3) 17.0(脚 部中央)	環状の脚部からなだらかな肩部に続いており、外傾してたるあがり、上端を丸くする。口縫部上端は丸くおさめる。肉薄である。	外面—頭部、ナデ。頭部に3条の擬似縫文を施す。口縫部、ヨコナデ。 内面—頭部以下、左方向へラケズリ。口縫部、ヨコナデ。	①密(精良) ②良好(堅固) ③内外面とも淡褐色。
Po 94 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)17.0(復) (2) 7.4(残)	わざかに張る底部から脚部から外傾してたるあがり、上端を丸くする。口縫部上端は丸くおさめる。	外面—タテハケ後ヨコナデ。 内面—頭部以下、右方向へラケズリ。口縫部、ヨコナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外面—茶褐色～黒褐色。 内面—浅褐色～深灰色。
Po 95 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)14.3(復) (2) 5.8(残)	外反してたるあがる単純口縁。口縫部は丸くおさめる。	外面—ヨコナデ。 内面—ヨコ方向へラミガキ後ヨコナデ。	①密(砂粒わざかに含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 96 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)14.0 (2) 5.1(残)	ゆるやかに弯曲する脚部から外傾してたるあがり、上端を丸くする。口縫部上端は中筋みの平坦面をもつ。	外面—頭部、タテハケ後ヨコナデ。 内面—頭部以下、右方向へラケズリ。脚部底面から口縫部下半にかけて縫面が光沢をもつことから、ヘラミガキ。 口縫部上半、ヨコナデ。	①密(砂粒わざかに含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 97 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(1)13.7(復) (2) 5.2(残)	内側無味に直立してたらむがる単純口縁。口縫部は上下に肥厚する。	外面—タテハケ後ヨコナデ。 内面—頭部以下、左方向へラケズリ。口縫部上半、ヨコナデ。	①密(わざかに砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po 98 11 —	第1号溝 状遺構	蓋	(2) 6.8(残)	直立してたるあがった後外傾する。口縫部は上下に肥厚する。	外面—ヨコナデ。 内面—頭部以下、左方向へラケズリ。口縫部下位ナデ、左ヨコ方向へラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも茶褐色。

插表7 第1号溝状遺構出土遺物観察表⑦

遺物番号 神社番号 国版番号	出土遺構 状況	器種	①口径(cm) ②高さ ③底径 ④基盤	形態	手法	備考 ①胎土 ②焼成 ③色調 ④他の特徴
Po 99 11 —	第1号溝 状況構	壺	①13.3(復) ② 3.3(残)	外傾してたちあがった後、わずかに下に肥厚する口縁。	外面—一部にヨコ方向へラミガキが見られる。把附部に一条の凹線文。内面—底部以下、左方向へラケズリ、口縁部、ヨコナダ。	①泥(砂粒をわずかに含む) ②良好 ③内外面とも茶褐色。
Po 100 11 —	第1号溝 状況構	壺	①17.6(復) ② 2.0(残)	上端を上方へくりあげる口縁。	内外面ともヨコナダ。	①泥(砂粒をわずかに含む) ②良好 ③内外面とも茶褐色。
Po 101 11 —	第1号溝 状況構	壺	①18.5(復) ② 4.7(残)	外傾してたちあがり口縁部と上端に平ら。上端は枝を有する。	内外面ともヨコナダ。	①泥(精良) ②良好 ③外表面・堅向色。 内面一茶褐色。
Po 102 12 —	第1号溝 状況構	注口	② 5.4(残)	上向きの注入口。圓孔側。	調整不明。	①泥(精良) ②不良 ③内外面とも淡褐色。
Po 103 12 8	第1号溝 状況構	高环	② 8.5(残)	高环の脚部部。	外面—タテハケ後ヨコ方向へラミガキ。 内面—ヨコナダ。箇部、タテ方向へウラ痕有り。	①粗(大きな砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。 ④外表面に黒斑有り。
Po 104 12 —	第1号溝 状況構	高环	② 4.6(残)	环部。外反して大きく聞く口縁部をもつ。	外面—ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。 内面—ヨコ方向へラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面一淡褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 105 12 —	第1号溝 状況構	高环	①23.8(復) ②14.4(残)	环部。外反して大きく聞く口縁部を有する。	外面一下位、ヨコハケ後タテ方向へラミガキ。口縫、タテ方向へラミガキ後ヨコナダ。 内面—タテ方向及びヨコ方向へラミガキ。	①泥(精良) ②良好 ③外表面とも茶褐色。
Po 106 12 8	第1号溝 状況構	高环	①14.0(復) ②14.4(残)	脚部部。下方に向って「八」の字形に開く脚部。脚部は被をもつ。円錐状の脚部。挿入式。	外面—耳眼との複合部及び脚部、ヨコ方向へラミガキ。他はタテ方向へラミガキ。 内面—脚部から箇部上位にかけてヨコナダ。箇部上位へラク模様。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面一淡茶褐色。 内面一淡茶褐色。
Po 107 12 8	第1号溝 状況構	器台	①18.7(復) ②11.0(残)	細い脚部に複合口縁状の底部をもつ。受部は外反してたちあがる。受部下端は丸く重し、上端は丸くおさめる。	外面—頂部から受部下面にかけて、ヨコハケ後タテ方向へラミガキ。受部、平行沈線文。 内面—脚部。ハラケズリ後ヨコナダ。受部下位はタテ方向へラミガキ。上位はヨコ方向へラミガキ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③外表面一淡褐色。 ④受部内外面にスス付着。
Po 108 12 —	第1号溝 状況構	器台	①17.9(復) ② 4.7(残)	複合口縁状の台部。下端は丸くおさめる。上端は上方へびがる。	外面—13条以上の平行沈線文。後にヨコナダ。 内面—左方向及び下方へラケズリ後ヨコナダ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③外表面とも淡褐色。
Po 109 12 —	第1号溝 状況構	器台	①22.4(復) ② 8.6(残)	複合口縁状の口縁を有する受部。口縁部上端は丸くおさめ、下端は下垂する。	外面—受部下面、ヨコ方向へラミガキ後タテ方向へラミガキ。18条以上の平行沈線文。 内面—ヨコ方向へラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面一淡褐色。
Po 110 12 —	第1号溝 状況構	器台	①20.7(復) ② 6.7(残)	複合口縁状の台部。	外面—台部下面、タテ方向へラケズリ。裏面、30条以上の平行沈線文。 内面—左方向へラケズリ後ヨコナダ。	①泥(細妙含む) ②や不良 ③外表面一暗褐色。
Po 111 12 —	第1号溝 状況構	器台	①15.9(復) ② 3.3(残)	外反しながら大きく聞く受部。口縁部上端は丸くおさめ、下端は下垂する。	外面—ヨコ方向へラミガキ後、一部タテ方向へラミガキ。 内面—ハラミガキ。	①泥(精良) ②良好 ③外表面一淡茶褐色。
Po 112 12 —	第1号溝 状況構	器台か	①23.7(復) ② 3.7(残)	外反してたちあがる口縁部。上端は丸くおさめる。	内外面ともヨコ方向へラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面とも淡褐色。
Po 113 12 9	第1号溝 状況構	壺	①10.6 ② 7.6(残)	無孔の壺。	外面—タテ方向及びヨコ方向へラミガキ。 内面—ハラミガキ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③外表面とも淡茶褐色。
Po 114 12 9	第1号溝 状況構	壺	①14.5 ② 7.0 ③ 5.7 ④ 5.7 (2つ目分)	無孔の壺。	内外面ともヨコ方向の潮かいへラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面一堅向色。 内面一淡茶褐色。
Po 115 12 9	第1号溝 状況構	壺	①12.8 ② 5.7 ③ 5.7 ④ 5.8 (2つ目分)	無孔の壺。	内外面ともヨコ方向へラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面とも淡褐色。 ④外表面に赤色鐵鏽痕。
Po 116 12 —	第1号溝 状況構	壺	① 8.5 ② 4.1 ③ 4.7 (2つ目分)	小型の無孔の壺。	外面—タテハケ後粗いタテ方向へラミガキ。 内面—ヨコ方向及びタテ方向へラミガキ。	①泥(砂粒を含む) ②良好 ③外表面一淡茶褐色。 内面一黒褐色。

捕表8 第1号溝状遺構出土遺物観察表⑧

遺物番号 種別 団番番号	出土遺構	器種	①口径(cm) ②高さ ③底径 ④最大径	形態	手法	備考
Po 117 12	第1号溝状遺構	蓋	①8.8(残) ②4.5	無孔の蓋。	外面ニヨコナデ。 内面ニヨコナデ。	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他の特徴
Po 118 12	第1号溝状遺構	蓋	①9.2(復) ②7.4(残) ③6.4(側) ④上(左)	上位に最大径をもつ胸部を有する小型品。	外面ニ側部、タテハケ後ヘラミガキ。 腹部から縁部、ヘラミガキ。 内面ニ腹部以下、右方向ヘラケズリ。 口縁部、右方向ヘラケズリ後ヨコ方 向ヘラミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外表面一淡茶褐色。 内面一茶褐色。
Po 119 12	第1号溝状遺構	蓋	①8.8(復) ②9.5(復) ③3.2 ④10.1(左) ⑤縫合下端	中央がちちあがり、縫部が外方に張り出た平底からちあがり、アクサン ドのない内縫合縫合口縫に達する小型品。	外面ニ底部から円部にかけてナデ。 縫部はヨコナデによってアフセント をつける。口縁部、平行沈継文後ヨ コナデ。 内面ニ底部に指おきえ。口縁部、ヨ コナデ。	①密(砂粒含む) ②やや不良 ③外表面とも明茶褐色。
Po 120 12	第1号溝状遺構	蓋	①9.0(復) ②4.6(復) ③8.8(側) ④上(左)	上位に最大径をもつ胸部からそのままで縫合につ づく。縫部から外傾してそのままだらがる口縁部に達する。	外面ニヨコハケ後ヨコナデ。 内面ニ縫合部底、左方向ヘラケズリ、 以下右方向ヘラケズリ。口縁部、ナ デ。	①やや粗 ②良好 ③外表面とも明茶褐色。
Po 121 12	第1号溝状遺構	脚付碗	①5.4(残) ②6.9	「ハ」の字状に開く短い脚部。脚部は丸く、	外面ニ板状工具によるケタカ方向のミ ガキがみられる。脚部底、ナデ。 内面ニ脚部下面、板状工具によるミ ガキ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外表面一褐色。 内面一茶褐色。
Po 122 12	第1号溝状遺構	脚付底部	①6.0(残) ②8.0(復)	「ハ」の字状に開く短い脚付の脚を有する底部。	外面ニ底部底面、ナデ。脚貼付部、 指おきえ。以上、タテハケ後ナデ。 内面ニ上方脚ヘラケズリ後ヘラミガ キ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外表面一褐色。 内面一茶褐色。
Po 123 12	第1号溝状遺構	台付の底部	①3.0(残) ②12.7(復)	「ハ」の字状に大きく開く台を有する。	内外面ともナデ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外表面一褐色。 内面一茶褐色。
Po 124 12	第1号溝状遺構	瓶	①13.9(復) ②6.2(残)	内側してちあがる。口縁部端は丸くおきめる。	外面ニケタハケ後ナデ。 内面ニ板状工具によるミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好 ③外表面一茶褐色～暗褐色。 内面一明茶褐色。
Po 125 12	第1号溝状遺構	鉢	①21.7(復) ②5.3(残)	口縁部は外傾する複合口縫を呈する。口縫上端 は丸くおきめ、下端は下垂する。	外面ニ側部から縫部にかけてヨコ方 向ヘラミガキ。口縁部、5条の平行 沈継文後ヨコナデヘラミガキ。 内面ニヨコ方向ヘラミガキ。	①密(精緻) ②良好(堅固) ③外表面一淡茶褐色。 内面一淡褐色。
Po 126 12	第1号溝状遺構	鉢	①18.0(復) ②4.2(残)	外傾する複合口縫状の口縫を有する。	外面にも細かいヨコカ方向ヘラミガ キ。	①密(精緻) ②良好(堅固) ③外表面とも淡明茶褐色。
Po 127 12	第1号溝状遺構	手づくね土器	①7.1 ②5.2	正立可能であるが不安定な平底を有する。口縁部 端は丸くおきめる。	外面ニナデ。指おきえ有り。 内面ニナデ。指おきえ有り。	①密(細砂粒含む) ②良好 ③外表面一褐褐色。 内面一暗褐色。

表9 第1号溝状遺構出土遺物観察表⑨

遺物番号 種別 団番番号	出土遺構	器種	①口径(cm) ②高さ ③底径 ④最大径	形態	手法	備考
Po 128 13 9	第4号溝状遺構	蓋	①16.0(復) ②3.8(残)	長めの縫部から外反し、 上下に肥厚する口縫に至る。	外面ニ縫部、ヘラミガキ。口縁部、 平行沈継文後ヘラミガキ消し。 内面ニヨコ方向ヘラミガキ。	①密(かな砂粒わざかに 含む) ②良好 ③外表面一褐色。 内面一褐色。
Po 129 13 9	第4号溝状遺構	蓋	①15.6(復) ②3.7(残)	短くくびれる縫部から、 直立して坂かたちあがる 複合口縫に至る。口縫 上端部は丸くおきめ、 縫部は、外方に張り出す。	外面ニ縫部、ヨコナデ。口縁部、平 行沈継文を施す。 内面ニ縫部以下左方向ヘラケズリ。 口縁部、板状工具によるミガキ。	①密(砂粒含む) ②良好(堅固) ③外表面一暗褐色。 内面一褐色。
Po 130 13 9	第4号溝状遺構	蓋	①15.0(復) ②4.3(残)	ねずかに外傾する縫会口 縫。口縫上端部は丸くお きめる。下端部は、ねず かに下垂する。	外面ニ縫部、ヨコカ方向のヘラミガキ。 口縫部は平行沈継文後ヨコカ方向ヘラ ミガキ。 内面ニ縫部以下左方向ヘラケズリ。 口縫部、ヨコカ方向ヘラミガキ。	①密(わざかに砂粒含む) ②良好 ③外表面とも淡茶褐色。 外表面一部にスス付着。

表10 第4号溝状遺構出土遺物観察表①

遺物番号 採取番号	出土遺構 状態	器種	①口径(cm) ②容積 ③底径 ④最大径	形態	手法	備考
Po 131 — 13	第4号溝 状態	甕	①17.2(底) ②4.6(底)	外傾してちあがる複合口縁。口縁部上端はわざかに厚くなり丸くおさめる。	外側一面縁部、粗いヨコ方向へラミガキ。口縁部、平行沈文後へラミガキ。ヨコナダ。内面一面縁部下以下、左方向へラケズリ、上半部へラケズリ後ヨコ方向へラミガキ。口縫部。ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①赤(砂粒含む) ②良好 ③外面一面縁部色—黒褐色。 ④内面一面縁部色。 ⑤その他の特徴
Po 132 — 13 9	第4号溝 状態	甕	①5.4(底) ②4.2(底)	わざかに外がしながら外傾してちあがる複合口縁。口縁部上端は丸くおさめる。	外側一面縁部、ヘラミガキ。口縁部平行沈文後ヨコ方向へラミガキ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部ヨコ方向へラミガキ。	①赤(わざかに砂粒を含む) ②良好 ③内外側とも淡茶褐色。
Po 133 — 13 9	第4号溝 状態	甕	①16.8(底) ②4.5(底)	無から外に向ける縁部から外反しないから外傾してちあがる複合口縁。口縫部は丸くおさめる。	外側一面縁部へラク工具による彫削痕のもののみられる。口縫部は平行沈文後ヘラミガキ。内面一面縁部以下右方向へラケズリ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ。	①赤(砂粒わざかに含む) ②良好 ③外面一面縁部色—淡茶褐色。 内面一面縁部色。
Po 134 — 13	第4号溝 状態	甕	①20.4(底) ②10.2(底)	なだらかな肩部から細かく外傾する縁部に達し、わざかに外反無味にちあがる複合口縁に至る。口縫部上端は丸くおさめる。	外側一面縁部(「シケイ」)に押す手印有り。肩部から口縫部まで、ヨコ方向へラミガキ。内面一面縁部以下、左方向へラケズリ後丸いヘラミガキ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ。	①赤(わざかに砂粒含む) ②良好(堅型) ③外面一面縁部色—淡褐色。 内面一部にスス付着。
Po 135 — 13	第4号溝 状態	甕	①18.1(底) ②4.1(底)	わざかに外傾する縁部に、口縫部上端はわざかに肥厚して丸くおさめ、下端はわざかに下曲する。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ。内面一面ヨコナダ後、ヨコナダ。	①赤(砂粒わざかに含む) ②良好 ③内外側とも淡茶褐色。
Po 136 — 13	第4号溝 状態	甕	①9.0(底) ②4.1(底)	外反気味に外傾してちあがる複合口縁。口縫部上端は下盛し、上端部は丸くおさめる。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。縁部へは下盛り、ヨコ方向へラミガキ。口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①赤(細かい砂粒をわざかに含む) ②良好 ③外面一面縁部色—淡茶褐色。 内面一部にスス付着。
Po 137 — 13	第4号溝 状態	甕	①15.3(底) ②4.0(底)	外反気味にちあがる複合口縁。口縫部上端は丸くおさめ、下端は下盛りで、下縫はアフセクトが強いため。	外側一面縁部以下タテ方向ハケメ。縁部は、横口目による押印。口縫部、平行沈文後一握ナシ酒済れる。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部、ヘラミガキ後ヨコナダ。	①赤(極めわざかに砂粒含む) ②良好 ③内外側とも淡茶褐色。
Po 138 — 13 9	第4号溝 状態	甕	①18.6(底) ②4.0(底)	大きく外傾してちあがる複合口縁。口縫部上端は先端が尖時で、下縫はアフセクトが強いため。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部8条の縦縫で行平行沈文後ヨコナダ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①赤(砂粒含む) ②良好 ③内外側とも淡茶褐色。
Po 139 — 13	第4号溝 状態	甕	①17.0(底) ②5.3(底)	短かく曲がる縁部から、外反気味に立ち上る複合口縁である。口縫部上端は先端が尖り、下端部は下盛する。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ消し。内面一面縁部下左方向へラケズリ後ヘラミガキ以下ラケズリ。口縫部、ヘラミガキ後ヨコナダ。	①赤(精良) ②良好(堅型) ③外面一面縁部色—淡茶褐色。 内面一面縁部色。
Po 140 — 13 9	第5号溝 状態	甕	①25.8(底) ②8.2(底)	なだらかな肩部から細かく外傾する縁部に達し、直立する複合口縁に至る。口縫部上端は丸くおさめ、下端はわざかに下曲する。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部、ヨコナダ。	①赤(砂粒わざかに含む) ②やや不良 ③外面一面縁部色。 内面一面縁部色。 ④外面にスス付着。
Po 141 — 13 9	第4号溝 状態	甕	①20.4(底) ②4.5(底)	外傾してちあがる複合口縁。口縫部上端は丸くおさめ、口縫部下端はわざかに下盛りする。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部、ヨコナダ。	①赤(砂粒含む) ②良好 ③外面一面縁部色—淡褐色。 内面一面縁部色。
Po 142 — 13	第4号溝 状態	甕	①20.4(底) ②5.4(底)	外反気味に外傾する複合口縁。口縫部上端は丸くおさめる。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部は平行沈文後ヨコナダ消し。内面一面縁部ヨコナダ。	①赤(わざかに砂粒含む) ②わざかに不良 ③外面一面縁部色。 内面一面縁部色。
Po 143 — 13	第4号溝 状態	甕	①17.1(底) ②4.3(底)	外傾する複合口縁。口縫部上端は、わざかに外方へ張り出す。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、平行沈文後ヨコナダ(?)。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部ヨコナダ。	①赤(精良) ②やや不良 ③内外側とも茶褐色。
Po 144 — 13	第4号溝 状態	甕	①37.6(底) ②8.0(底)	外傾して長くちあがる複合口縁。口縫部上端は厚い。下端は外方へ張り出す。	外側一面縁部、ヨコナダ(複合工具の小口直食型)。口縫部、平行沈文後ヨコナダ。内面一面縁部以下左方向へラケズリ。口縫部、ヨコナダ。	①赤(砂粒わざかに含む) ②やや不良 ③内外側とも淡茶褐色。
Po 145 — 14	第4号溝 状態	甕	①19.5(底) ②4.6(底)	外傾してちあがる不明瞭な複合口縁。口縫部上端は厚い。下端は外方へ張り出す。	外側一面縁部、ヨコナダ。口縫部、ヨコナダ。内面一面縁部下以下ケズリ、一部に複合工具痕。口縫部、ヨコ方向へラミガキ後ヨコナダ。	①やや粗 ②良好 ③内外側とも淡茶褐色。

捕表11 第4号溝状遺構出土遺物観察表(2)

遺物番号 排列番号 団版番号	出土通構	器種	①口徑(cm) ②高さ ③成形 ④最大径	形態	手法	備考 ①粘土 ②焼成 ③色調 ④他の特徴
Po.146 14 —	第4号溝 状遺構	甕	①14.4(復) ② 5.4(残)	切くぐれ物する頭部から 複合口縁に至る。口縁部 下端は外方に張り出 して縁をもち、上端はカ ットする。	外面一ヨコナギ。 内部一頭部以下右方向へラケズリ。 口縁部、ヨコナギ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.147 14 9	第4号溝 状遺構	甕	①15.3 ② 6.1(残)	短かく曲がる頭部から複 合口縁に至る。口縁上端 部は、わずかに内側へ折 り曲げ、下端部は強く外 方へつぶみ出す。	外面一ヨコナギ。 内部一頭部以下右方向へラケズリ。 口縁部ヨコナギ。	①南(砂粒わざかに含む) ②良好 ③外直一黒褐色～淡褐色。 内面一淡褐色。 ④口縁部外縁全体にスッペ付。
Po.148 14 9	第4号溝 状遺構	甕	①12.6 ②12.7 ③15.9 (頭部上 半)	わざかに平滑のアケセン トをもつ丸い底盤から 最大径がよくなる球状 の頭部に達する。頭部は 短かく複合口縁に至る。 口縁部上端は丸くおさま り、下端は外方に張り出 しながらも極わずかに下斎 乳頭である。	外面一底盤から頭部、底部にかけて テハケ、頭部から腹部にかけてハ ケ後ヨコナギ。口縁部ヨコナギ。 内部一頭部以下右方向へラケ ズリによりヨコナギを強く仕上げる。 頭部一ヨコナギ。	①南(わざかに砂粒含む) ②やや不良 ③外直一淡褐色～黒褐色。 内面一淡褐色。 ④外直全周にスッペ付。
Po.149 14 9	第4号溝 状遺構	甕	①16.0 ② 9.7(残)	なだらかな底盤からかい だ頭部に至り、外反形状に わざかに外側する複合口 縫がつく。口縁下端部は 外方へ船くまみ出し、 上端部は平底面をつくる。 底厚は薄い。	外面一肩部以下テハケ後脚かいヨ コナギ。頭部一頭部、テハケ後ヨ コナギ。口縁部、ヨコナギ。 内部一頭部以下右方向へラケ ズリによりヨコナギを強く仕上げる。 頭部一ヨコナギ。	①南(極小さな砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po.150 14 —	第4号溝 状遺構	甕	①14.3(復) ② 4.7(残)	外傾する底盤口縫の置き。 口縁上端部は丸くおさま る。	外面一ヨコナギ。 内部一頭部以下右方向へラケズリ。 口縁部ヨコナギ。	①南(砂粒を少し含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。
Po.151 14 —	第4号溝 状遺構	底部	② 2.8(残) ③ 3.2	不安定な平底	外面一タケ方向のハケメ。底部にも ハケメをもつ。 内部一ハケメ。	①南(わざかに砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。
Po.152 14 10	第4号溝 状遺構	高环	② 9.5(残)	葉脚部。下方へ突って開 く脚部。脚部はあまり開 かない。孔を有す。	外面一タケ方向のヘラミガキ。孔は 外側から内側へあけられる。 内部一窓内に設りがみられる。 環部との接合法不明。	①南(砂粒をわざかに含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。 ④外面に赤色塗装痕。
Po.153 14 10	第4号溝 状遺構	高环	② 9.9(残) ③12.0(復)	脚脚部。「ハ」の字状に開く脚部。 脚脚部は最ももつ。受部 は五角。「ハ」の字状に 聞く。口縁部は上端に押 厚し、上端は先端より、下 端は下垂する。	外面一脚部。タケ方向のヘラミガキ とヨコナギ。脚部は五角の細かいヘラミガキ。 受部は五角。丸みを帯びた状のもので外から内に 向けてある。	①南(砂粒含む) ②堅固(堅固) ③内外面とも明茶褐色。
Po.154 14 10	第4号溝 状遺構	基台	①19.3 ②14.9 ③14.2	「ハ」の字状に聞く脚部。 脚脚部は最ももつ。受部 は五角。「ハ」の字状に 聞く。口縁部は上端に押 厚し、上端は先端より、下 端は下垂する。	外面一脚部はヨコ方向へラミガキ。 以上は受部。タケ方向へラミガキ。 下端はヨコ方向へラミガキ。 内部一脚部、ヨコナギ。脚部、下端は ナゲ。上端はタケ方向のヘラミガキ。 受部はていねいなヨコ方向へラミガキ。	①南(精良) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。 ④受部内面に赤色塗装痕。
Po.155 14 —	第4号溝 状遺構	基台	①20.5(復) ② 6.8(残)	外反しながら大きく述べ 複合口縁状の受部。口縁 部上端は丸くおさまる。	外面一平行沈文後右方向へラミガキ。 内部一ヨコ方向へラミガキ。	①南(精良) ②良好(堅固) ③内外面とも淡褐色。 内面一淡褐色～淡茶褐色。 ④外面に赤色塗装痕。
Po.156 14 —	第4号溝 状遺構	基台	② 5.4(残) ③20.0(復)	複合口縁状の台部。下端 は丸くおさまる。	外面一30条以上の平行沈文。 内部一不明。	①南(砂粒含む) ②やや不良 ③内外面とも淡褐色。
Po.157 14 —	第4号溝 状遺構	基台	② 5.9(残) ③16.6(復)	複合口縁状の台部。下端 は丸くおさまる。	外面一平行沈文後ヨコ方向へラ ミガキ消し後ヨコナギ。 内部一右方向へラケメ後ヨコナギ。	①やや粗い ②やや不良 ③外直一淡褐色～黒褐色。 内面一淡褐色。
Po.158 14 —	第4号溝 状遺構	基台	② 5.2(残)	外反する複合口縁状の受部。 口縁部下端は下垂する。	外面一ヨコ方向の細かいヘラミガキ。 内部一タケ方向の細かいヘラミガキ。	①南(精良) ②良好(堅固) ③内外面とも明茶褐色。 ④外面にわざかに赤色塗装痕。
Po.159 14 —	第4号溝 状遺構	高环	② 3.6(残) ③13.6(復)	「ハ」の字状に大きく開く 脚部。	外面一ヨコ方向へラミガキ。 内部一ハケメ後、ヨコナギ。	①南(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。

挿表12 第4号溝状遺構出土遺物観察表③

遺物番号 神社番号 回収番号	出土遺構	器種	①口徑(cm) ②器高 ③底径 ④最大径	形 態	手 法	備考	①粘土 ②焼成 ③無焼 ④その他の特徴
Po 160 14 10	第4号溝 状遺構	蓋	①10.4 ②5.5 ③5.5 ④5.5 ⑤つまみ紐 4.0	長めのつまみを有する無孔の蓋。	外面一ヨコ、及びナメ方向の細かいヘラミガキ。つまみ部外側に指押えのこる。上面はナデ。内面一タテ方向へラミガキ。(ハクリ激しい) 最上部のみナデ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。	
Po 161 14 10	第4号溝 状遺構	蓋	①12.4 ②5.1 ③5.1 ④5.1 ⑤つまみ紐 4.0	小さなつまみを有する無孔の蓋。	外面一全域ヨコ方向の細かいヘラミガキ。内面一下半部、左下方へケズリ後ヨコ方向へラミガキ。上半部、ナデ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③外面一時褐色・茶褐色。 内面一淡褐色。	
Po 162 14 10	第4号溝 状遺構	蓋	①3.0 ②つまみ紐 4.5	無孔の蓋。	外面一つまみ部底までタテ方向へラミガキ。つまみ部、外面ナデ上面部へラミガキ。内面一タテ方向へラミガキ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。	
Po 163 14 —	第4号溝 状遺構	蓋	①3.5 ②つまみ紐 3.5	大きめのつまみを有する無孔の蓋。	外面一つまみ部底までタナ方向のヘラミガキ。つまみ部外側ヨコナデ上半ヨコ方向へラミガキ。内面一左方向へケズリ後ナデ。	①泥(砂粒含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色。	
Po 164 14 —	第4号溝 状遺構	蓋	①4.6(残) ②11.9	無孔の蓋。つまみ部がハクリする。	外面一タテハケ。つまみがハクリしたところに指押えがみられる。内面一ヨコナデ及び指押え。	①泥(砂粒少し含む) ②良好 ③内外面とも淡茶褐色~黒褐色。	
Po 165 14 —	第4号溝 状遺構	底部	①3.2(残) ②6.2	台付の底部	外面一板状工具によるケズリ後ヘラミガキ。内面一ヨコ及びタテ方向へラミガキ。	①やや粗い ②良好 ③外面一茶褐色。 内面一褐色。	
Po 166 14 —	第4号溝 状遺構	低脚环	①3.4(残) ②10.2(復)	大きく開ぐる脚部を有する。	外面一ヨコナデ。 内面一脚部、左方向、上方面へラケズリ後ナデ。環部、ヘラケズリ後ナデ。	①やや粗い ②良好 ③内外面とも淡褐色。	
Po 167 14 —	第4号溝 状遺構	鉢	①24.3(復) ②3.9(残)		外面一脚部、ヨコ方向へラミガキ。 口縁部は平行沈線文後ヨコ方向へラミガキ。 内面一ヨコ方向のヘラミガキ。口縁部以下に板状工具を用いたケズリ痕残る。	①泥(砂粒少し含む) ②良好 ③内外面とも淡褐色。 ④内面に赤色塗装跡。	

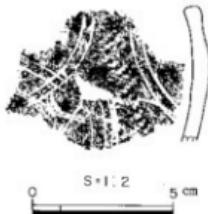
捕表13 第4号溝状遺構出土遺物観察表④

第4章まとめ—出土土器について

今回の調査で出土した土器は、縄文時代の土器1点、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器160点余である。これらについて若干のまとめを試みる。

第1節 縄文時代の土器（挿図22、図版10）

縄文時代の土器の出土は1点のみに留まった。第4号溝状遺構検出中に出土したもので、口縁部片である。外面に半截竹管の内側を用いた速弧文と縱走する縄文（RL）を施す。口縁部上端にも不明瞭ながら縄文を確認することができる。縄文時代中期前半のものと思われる。船岡町内初の出土である。



第2節 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器（挿図7～14、図版7～11）

この時期の土器は本遺跡出土の土器の大半を占め、第1号溝状遺構と第4号溝状遺構を中心に出土した。その器種は壺、壺、高坏、器台、蓋、碗、鉢、低脚坏と多様である。壺壺類が主流を占め、図化できたものだけでも107個体を数える。次に多い器種が器台11個体、蓋10個体、高坏6個体とつづき、蓋の出土数が比較的多く、高坏のそれを超える。出土土器はほとんどが部分片で、復原に努めたのであるが、完形品はPo 114とPo 148のみである。以下、出土土器の内、1壺壺類、2高坏、3器台、4蓋、5鉢、6底部のみのものについてまとめる。(6)底部の内、壺壺類の底部と考えられるものもあるが、上部と接合しないため底部の項で一括して扱うこととする。

1. 壺壺類

壺壺類は口縁部片がほとんどである。口縁部の形態に注目すると、I…複合口縁を有するもの、II…頸部から外傾してたちあがり、そのまま端部に至る口縁（C）を有するもの、III…頸部から外傾してたちあがった後、上位で外反して端部に至る口縁（L）を有するもの、IV…頸部から直立してたちあがり、そのまま端部に至る口縁（L）を有するもの、V…頸部から外反してたちあがり、そのまま端部に至る口縁（C）を有するもの、VI…頸部から外傾してたちあがり、端部で棱をもつ口縁（P）を有するもの、VII…端部で左右に肥厚する口縁（T）を有するもの、VIII…頸部からそのまま内傾してたちあがる口縁（N）を有するもの、の8形態に分類可能である。次にこの8形態各々について、口縁部調整法に注目してみる。

I. 複合口縁を有するもの（Po 1～Po 70, Po 128～Po 149）

複合口縁は、形態的に直立するもの、外傾するもの、外反するものがみられるが、ここではこれらの形態を捨象して、弥生時代後期に複合口縁の外面に施される平行沈線文にまず注目して次の3分類を行なう。I-A…平行沈線文を施したままのもの、I-B…平行沈線文を施した後、それの一端あるいは全体が消されるもの、I-C…平行沈線文を施さないもの。

I-Aは口縁部内面調整によってさらに2分類される。ヨコナデするもの（I-A-a）、ヘラミガキするもの（I-A-b）である。前者に属するものはPo 1～Po 4があり、後者にはPo 5～Po 8が属する。I-Aの内面頸部下へラケズリ方向は左方向4、右方向1、不明3であり、不明3を捨象して考えると、左方向が主流を占める。I-Aの土器の内、Po 3、Po 6は肩部に貝に

より押引沈線文を施す。Po 3はサルボウ貝系の貝、Po 6はベンケイ貝系の貝を用いたもので、いずれも右に傾き、部分的観察ではあるが、原体が左→右に動いていると考えられ、いずれも内面頸部下へラケズリ方向と逆である。

I-Bは平行沈線文を消す調整法、口縁部内面調整によって3分類される。ヘラミガキを用いて平行沈線文を消すものとヨコナデを用いて平行沈線文を消すものがあるが、前者の場合口縁部内面全面にヘラミガキをし(I-B-a)、後者の場合口縁部内面にヘラミガキ後ヨコナデするもの(I-B-b)とヨコナデのみするもの(I-B-c)がある。I-B-aに属するものはPo 9～Po 21、Po 128～Po 134、I-B-bにはPo 23～Po 44、Po 135～Po 139がI-B-cにはPo 45～Po 62、Po 140～Po 144が属する。I-Bの内面頸部下へラケズリ方向は左方向49、右方向6、左右方向3、不明11とI-Aと同様に左方向が主流を占める。I-Bの土器の内、肩部に貝による押引沈線文、押圧文を施すものがある。前者を施すものは8個体あり、ベンケイ貝系の貝を用いるものはPo 14、Po 17、Po 42、Po 44、サルボウ貝系の貝を用いるものはPo 24、Po 58である。いずれも右に傾き、部分観察ではあるが原体は左→右方向に動いている。内面頸部下へラケズリ方向は不明のものもあるが、いずれも左方向である。後者を施すものはPo 45、Po 47の2個体で、いずれもサルボウ貝系の貝を使用し、施文は右に傾く。内面頸部下へラケズリ方向はいずれも左方向である。

I-Cは口縁部内外面ともヨコナデするもの(I-C-a)と口縁部内外面ともヘラミガキするもの(I-C-b)がある。前者にはPo 63～Po 70、Po 145～Po 147が属する。後者に属するものはPo 22のみで本遺跡出土の壺甌類では特異なものである。内面頸部下へラケズリ方向は、左方向3、右方向7、不明5と右方向の数が左方向のそれを逆転する。I-Cでは肩部に貝を用いた施文をするものはない。

II. 頸部から外傾してたちあがり、そのまま端部に至る口縁を有するもの(Po 87、Po 92、Po 94、Po 96)

口縁部の調整法によって次の様に分類する。II-A…ヘラミガキするもの、II-B…ヨコナデのみするもの、の2分類である。

II-Aは、ヘラミガキのみを口縁部内外面にするもの(II-A-a)と口縁部内外面にヘラミガキした後ヨコナデするもの(II-A-b)がある。II-A-aにはPo 87が属する。Po 87は頸部から胴部にかけても外面を丁寧にヘラミガキする。II-A-bにはPo 92が属する。内面頸部下へラケズリ方向はPo 87が左方向、Po 92は不明である。II-A-aはヘラミガキを多用することからI-B-aと、II-A-bはヘラミガキ後ヨコナデすることからI-B-bと調整法において共通する要素をもつ。

II-BにはPo 94、Po 96、Po 150が属する。内面頸部下へラケズリ方向は左方向1、右方向2である。II-BはI-C-aと調整法において共通する要素をもつ。

III. 頸部から外傾してたちあがった後、上位で外反して端部に至る口縁を有するもの(Po 93)口縁部内外面をヨコナデする。外面頸部以下もヨコナデする。内面頸部下へラケズリ方向は左方向である。I-C-aと調整法において共通する要素をもつ。

IV. 頸部から直立してたちあがり、そのまま端部に至る口縁を有するもの (Po 89～Po 91, Po 97)

口縁部の調整法によって次の様に分類する。IV-A…ヘラミガキするもの、VI-B…ヨコナデのみするもの、の2分類である。

IV-Aには、Po 89～Po 91が属し、口縁部内外面にヘラミガキのみするものであり、外面頸部以下もヘラミガキをし、ヘラミガキを多用する。Po 90はヘラミガキの後全面に赤色塗彩するものである。内面頸部下ヘラケズリ方向は右方向1、不明1である。IV-Aは、ヘラミガキを多用することから、調整法においてI-B-aと共に共通する要素をもつ。

IV-BにはPo 97が属する。内面頸部下ヘラケズリ方向は左方向である。IV-BはI-C-aと調整法において共通する要素をもつ。

V. 頸部から外反してたちあがり、そのまま端部に至る口縁を有するもの (Po 95)

口縁部外面をヨコナデし、内面をヘラミガキ後ヨコナデする。内面頸部下ヘラケズリ方向は不明である。Vは内面のヘラミガキをヨコナデすることから、I-B-bと調整法において共通する要素をもつ。

VI. 頸部から外傾してたちあがり、端部に稜をもつ縁を有するもの (Po 98～Po 101)

口縁部の調整法で次の様に分類する。VI-A…ヘラミガキするもの、VI-B…ヨコナデのみするもの、の2分類である。

VI-Aは口縁部外面をヨコナデし、内面にヘラミガキするもの (VI-A-a) と、口縁部外面を一部ヘラミガキし、内面をヨコナデするもの (VI-A-b) がある。前者にはPo 98が、後者にはPo 99が属する。いずれも内面頸部下ヘラケズリ方向は左方向である。VI-A-aは口縁部内面のみヘラミガキすることから、I-A-bと調整法において共通する要素をもつ。

VI-BにはPo 100、Po 101が属する。内面頸部下ヘラケズリ方向はいざれも不明である。VI-Bは調整法においてI-C-aと共に共通する要素をもつ。

VII. 端部で左右に肥厚する口縁を有するもの (Po 85, Po 86)

Po 86は口縁部外面をヨコナデし、内面をヘラミガキする。Po 85は口縁部内外面ともヘラミガキする。Po 86は口縁部内面のみヘラミガキすることからI-A-bと、Po 85はヘラミガキを多用することからI-B-aと調整法において共通する要素をもつ。

VIII. 頸部からそのまま内傾してたちあがる口縁を有するもの (Po 71)

Po 71は口縁部内外面ともヨコナデ調整する。頸部には凸帯を有し、肩部に綾杉文を施す。内面頸部下ヘラケズリ方向は右方向である。調整法においてI-C-aと共に共通する要素をもつ。

2. 高坏

高坏は坏部と筒脚部の接合するものがなく、固化できたものが杯部2点、筒脚部4点と筒脚部の数がまさることから筒脚部の形態に注目してまず次の2つに分類する。I…筒部と脚部の境界が不明瞭なもの (▲)、II…筒部が筒状を呈し、脚部が「八」の字状に開く、筒部と脚部の境界が明瞭なもの (■)。

I. 筒部と脚部の境界が不明瞭なもの (Po 103, Po 152)

Po 103は外面ハケ後粗いヘラミガキ、内面脚部ヨコナデ、筒部絞り後ナデる。Po 152は外面へ

ラミガキ、内面脚部ナデ、筒部紋り後未調整である。Po 103は坏部と一体造りのもので、所謂円板充填によって坏部の穴を塞ぐ。Po 152は坏部との関係は不明である。

II. 筒部と脚部との境界が明瞭なもの (Po 106, Po 153)

いずれも外面をヘラミガキ、内面脚部をヨコナデする。内面筒部をPo 106においてはヘラとナデを用いて調整する。Po 153においては、筒部の穴をヘラを用いて穿つ。いずれも坏部と別々に造るものである。Po 153は中央に穴のあく坏部に筒脚部を挿入した後、坏部の穴を粘土で塞ぐものであると考えられ、Po 104がこの方法で接合される坏部である。この坏部は内外面ともヘラミガキする。

3. 器台

受部と台部の形態に注目して次の様に分類する。I …複合口縁状のもの、II …その他。

I. 複合口縁状のもの (Po 107～Po 111, Po 155～Po 158)

受部と台部の接合するものが二種類ある。受部と台部を別に扱う。受部、台部のいずれも複合口縁状を呈することから、1. 壺甌類—Iの分類に準じて述べることとし、平行沈線文の様子から次の様に分類する。I-A…平行沈線文を施したままのもの、I-B…平行沈線文を施した後、それの一部あるいは全体が消されるもの。I-C…平行沈線文を施さないもの、の3分類である。

受部I-Aは内面全面にヘラミガキする。受部I-Bは外面を平行沈線文後ヘラミガキ、内面を全面ヘラミガキする。受部I-Cは内外面とも全面ヘラミガキする。受部I-AにはPo 107, Po 109が、受部I-BにはPo 155が、受部I-CにはPo 111, Po 158が属する。1. 壺甌類—I(1-I)に対比すれば、受部I-Aは1-I-A-bに、受部I-Bは1-I-B-aに、受部I-Cは1-I-C-bに対応する。

台部は全て内面ヘラケズリ後ヨコナデする。台部I-Bは平行沈線文後ヘラミガキするもの(台部I-B-a), 平行沈線文後ヨコナデするもの(台部I-B-b)がある。台部I-AにはPo 110が、台部I-B-aにはPo 157が、台部I-B-bにはPo 108が属する。台部I-Aは1-I-Aに、台部I-B-aは1-I-B-aに、台部I-B-bは1-I-B-b・Cに対応する。

II. その他 (Po 154, Po 159)

Po 154はほぼ完形品で、Po 159は脚部のみである。受部は大きく外方へ開き、端部で上下に肥厚する。筒部は筒状を呈し、脚部は「八」の字状に開く。Po 154は受部から筒部にかけて内外面ともヘラミガキする。脚部はPo 154においては外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ、Po 159においては外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ヨコナデする。ヘラミガキを多用するものである。

4. 蓋

器全体の形態にまず注目して次の様に分類する。I …笠状に開くもの、II …その他。

I. 笠状に開くもの (Po 114～Po 117, Po 160～Po 164)

調整法によってI-A…ヘラミガキするもの、I-B…ヘラミガキしないものに分ける。

I-Aには内外面ともヘラミガキするもの(I-A-a)^{注7}と外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ後ナデするもの(I-A-b)がある。I-A-aには、Po 114～Po 162が、I-A-bにはPo

163が属する。I-A-aの内、Po 161はつまみ径が他のものと比して小さく、特異である。

I-Bは内外面ともヨコナデ仕上げするものであり、Po 117、Po 164がこれに属する。Po 164は外面にヨコナデ以前にタテハケを施す。

Ⅱ. その他 (Po 113)

Po 113は内外面ともヘラミガキするが丁寧でなく、器面は平滑でない。

5. 鉢

所謂鉄鉢形土器である。完形品はなく全て口縁部片であり、それが複合口縁を呈することから1壺甕類—I (I-I) の分類に準じて述べることとする。平行沈線文の様子からA…平行沈線文を施したままのもの、B…平行沈線文を施した後、その一部あるいは全体を消すもの、C…平行沈線文を施さないものの3つに分ける。Aに概当する個体は出土していない。Bに属するものとしてはPo 125があり、口縁部外面を平行沈線文後ヘラミガキし、内面もヘラミガキする。口縁部下も内外面ともヘラミガキし、ヘラミガキを多用する。Cに属するものはPo 126、Po 167がある。口縁部及び口縁部下内外面ともヘラミガキし、これもヘラミガキを多用する。CはBに比して口縁部の外傾が大きくなる。BはI-I-B-aに、CはI-I-C-bに、対応する。

6. 底部

底面の形態にまず注目して、I…平底のもの、II…丸底化した平底のもの、III…脚付のもの、IV…台付のものに分類する。I、IIは1、壺甕類の底部であると考える。

I. 平底のもの (Po 72~Po 82、Po 84、Po 151)

外面の調整法によって、さらにA…ヘラミガキするもの、B…ヘラミガキしないものに分ける。I-Aに属するものにはPo 72、Po 73、Po 79がある。Po 72は内面もヘラケズリ後ヘラミガキする。他は内面ヘラケズリである。

I-Bに属するものにはPo 74~Po 78、Po 80、Po 82、Po 84、Po 151がある。外面にヘラミガキしない場合Po 77を除いてハケを用いる。Po 77、Po 88は内面にもハケを用いる。他は全て内面ヘラケズリである。

II. 丸底化した平底のもの (Po 83、Po 148)

Po 83は外面ハケ後にヘラミガキし、内面もヘラケズリ後ヘラミガキする。Po 148は完形品の底部であるが、ほとんど丸底といえるもので、外面ハケ、内面指おさえする。

III. 脚付のもの (Po 121、Po 122、Po 166)

Po 121は外面を板状のものでミガキ、内面をヘラミガキする。Po 122は外面ナデ、内面をヘラミガキする。Po 166は外面ナデ、内面ヘラケズリ後ナデする。Po 166は低脚壺の底部と考えられるが、他は器種不明である。

IV. 台付の底部 (Po 165、Po 123)

Po 165は外面ハケ後ヘラミガキし、内面もヘラミガキするPo 123は内外面ともナデる、いずれも器種は不明である。

以上1~6まで器種ごとに述べたのであるが、出土点数の豊富な1壺甕類—I複合口縁を有するものを中心に時期的な流れを概観する。

1 壺蓋類-Iにおいて、口縁部外面に施される平行沈線文の様子からI-A~I-Cの3分類を行なった。これをI-Aにおける平行沈線文の盛期、I-Bにおける平行沈線文の消滅過程、I-Cにおける平行沈線文の完全消滅と捉えると、I-A→I-B→I-Cという流れを追うことができる。またこの流れとあわせて口縁部調整に着目すると次の様になる。I-A-aでみられなかった口縁部内面へラミガキがI-A-bで現われ、I-B-aになるとそのへラミガキが平行沈線文を消す操作として口縁部外面まで施される様になり、ヘラミガキの盛期を迎える。これがI-B-bになると、口縁部内面のヘラミガキは残るが、口縁部外面のヘラミガキが消え、平行沈線文を消す操作としてヨコナデが用いられる様になり、その操作の際に口縁部内面のヘラミガキがナデ消される。さらにI-B-cになると口縁部内外からへラミガキが消るが、平行沈線文が残る。I-C-aになるとヨコナデのみを用い、平行沈線文を施さない。I-C-bはへラミガキを施すが、I-C-aと並行するものと思われる。口縁部の平行沈線文とその調整をこの様に考えると、1壺蓋類-IはI-A-(a→b)→I-B-(a→b→c)→I-C-(a·b)という時期的な流れを追うことができる。口縁部以外の部位に目を移すと、肩部の貝による押引沈線文と押圧文がI-A~I-Bまでみられ、I-Cには消滅する。いずれの文様も右傾し、^{註9}その施文方向は右方向であると考えられる。内面頸部下へラケズリ方向はI-A~I-Bまで左方向が主流を占め、肩部の施文と逆方向である。I-Cになるとへラケズリ方向は右方向が多くなる。^{註10}底部形態は、I-A~I-Bまで平底、I-Cになるとほぼ丸底化した平底になると考
る。

以上、1壺蓋類-Iの時期的な流れを追ったが、口縁部の平行沈線文と調整技法、内面頸部下へラケズリ方向等をみていくと、I-BからI-Cへの変化に画期を見い出すことができる。また、他遺跡出土の土器との並行関係を考えると、I-Aは倉吉市阿弥大寺Ⅲ期、I-Bは同Ⅲ期とⅣ期の空白期間、I-C-aは同Ⅳ期に並行すると考えられる。

1壺蓋類-Iにおいて考えた時期的な流れは、複合口縁状の受台部を有する器台(3-I)にも対応させることができ、3受部I-A→I-B→I-Cと流れを追うことができる。同様に5鉢においても、5-Bと1-I-B-a、5-Cと1-I-C-bとの対応が可能である。

註1 鳥取県埋蔵文化財センター 久保権二朗氏御教示による。

註2 貝については、鳥取県埋蔵文化財センターにおいて久保権二朗氏指導のもと、サルボウ貝とベンケイ貝を用いて実際に粘土上に施文した結果に基いて、「サルボウ貝系」「ベンケイ貝系」の2種に分けた。サルボウ貝はフネガイ科に、ベンケイ貝はタマキガイ科に属する。

註3 肩部の押引沈線文の方向は、註2の実験結果より判断した。その方向は、土器を口縁部を上にして直立させて、正面から見たものである。

註4 口縁部内面へラミガキ後のヨコナデが完全である時、ヘラミガキが全て消されその痕跡の確認が不可能である。現状でヘラミガキ調整が確認できるものだけI-B-bに属する個体とした。

註5 Po 9、Po 129は口縁部内面を板状の工具で磨いており、ヘラミガキとは様相を異にするが、磨くということでI-B-aに入れた。

註6 土器高环にみられる所謂挿入法とは異なり、又所謂円板充填法とも異なり、二者の中間的な形態と筆者は考える。

註7 内面のヘラミガキが丁寧であり、高环の出土数が少ないと考え合わせると、蓋の坏的な使用法一盛るも考えられる

のではないか。

註8 中央がもちあがるものも含める。

註9 鳥取県埋蔵文化財センター久保権二朗氏御教示によると、東伯町大峰遺跡、江府町岩ヶ城遺跡の完形土器を観察した結果、肩部の押引沈線文が右方向に施される時、口縁部の平行沈線文は左方向に施される場合が過例であるということである。

註10 東伯町教育委員会『大峰遺跡発掘調査報告書』1985年においても、平行沈線文の消失と内面頸部下へラケズリ方向の逆転との同時性が述べられている。

註11 平行沈線文の消失、内面頸部下へラケズリ方向の逆転をその指標と考える。

註12 倉吉市教育委員会『上米横造跡群発掘調査報告Ⅱ—阿勞大寺地区—』1980年、鳥取県立八益立つ風土記の丘資料館『第15回埋蔵文化財研究会、弥生後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について 発表記録』1985年

おわりに

奈免羅・西の前遺跡は、調査前の土砂採取によって破壊が進んでいたが、発掘調査によって溝状造構5本、土壙4基、横穴式石室の一部を調査することができた。河原石と工事車輛等によって踏み固められた表土とに悩まされる調査であったが、地元作業員の手に肉刺をつくりながらの献身的な努力によって調査を進めることができた。

出土土器の内、第1号・第4号溝状造構を中心に出土した土器は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器を考える上で良い資料となるものと思われ、第4章で若干の考察を試みた。造構については、筆者の能力不足と時間に制約され、その性格等を言及することができなかつたことが残念である。

整理作業においては、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々から多くの御教示、御指導を戴いた。なかでも、久保権二朗氏から得た御教示は遺物整理の際に大きな力となった。

今回の調査において得た成果は、少ないものではないと思うのだが、調査前に既に進んでいた遺跡破壊がなければ、より多くの成果を得ることができたと思う。破壊された遺跡は私達に何も語ってくれない。

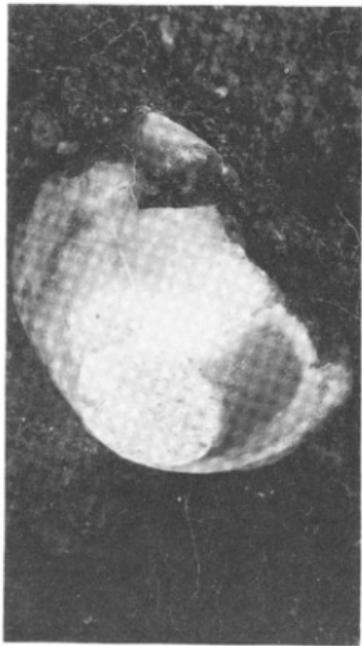
最後になったが、現地での発掘調査及び整理作業においてお世話になった方々に厚くお礼を申し上げるとともに、土砂採取及び今回の調査で安眠を妨げられた奈免羅古墳の被葬者に合掌。



調査区全景（西より）



第1号溝状遺構完掘状況（南西より）



遺物 (P o 76) 出土状況



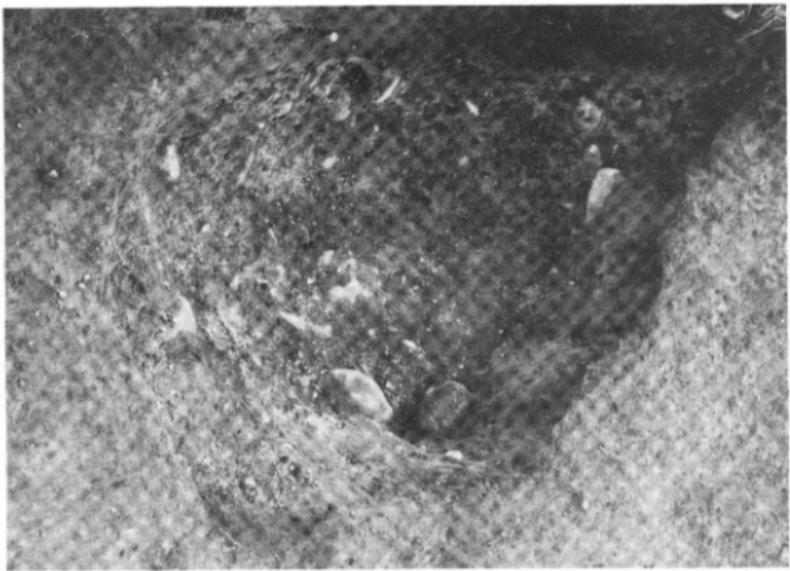
第 1 号溝状遺構にて



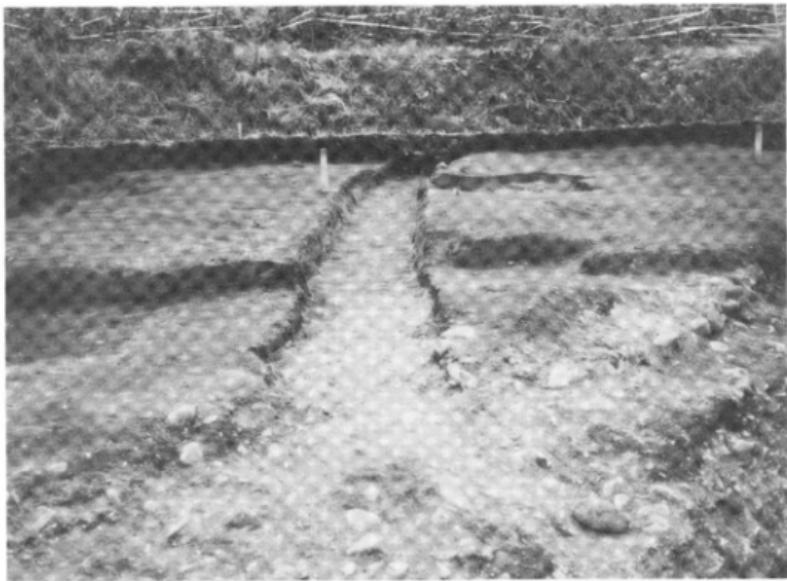
第 1 号溝状遺構 A-A' 土層断面



遺物 (P o 107) 出土状況



第 2 号溝状造構完掘状況（北より）



第 3 号溝状造構完掘状況（南より）



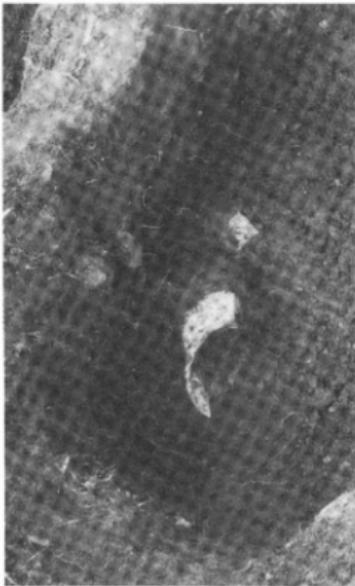
第4号、第5号溝状遺構完掘状況（西より）



第4号溝状遺構遺物出土状況（南東より）



第1号、第2号土壤完掘状況（西より）



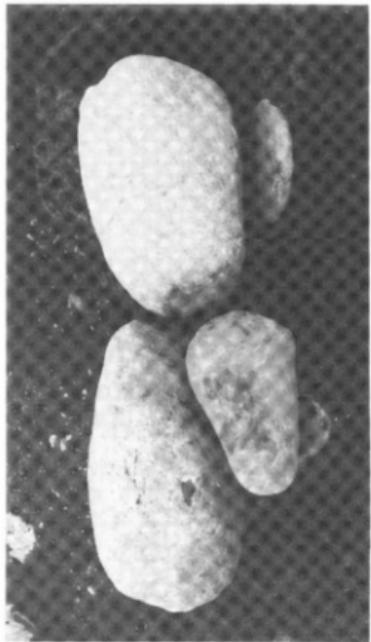
第4号土壤遺物（P.o.169）出土状況



第3号土壤完掘状況（西より）



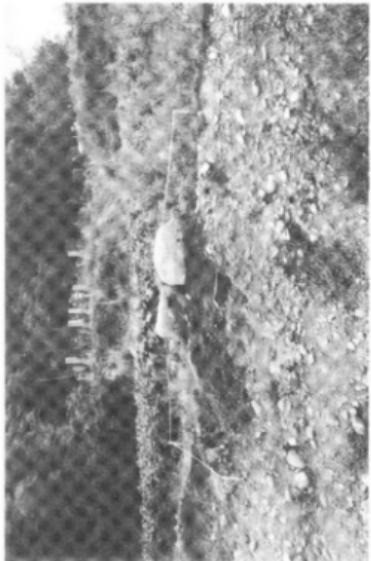
第4号土壤完掘状況（南より）



(上より)



(北より)

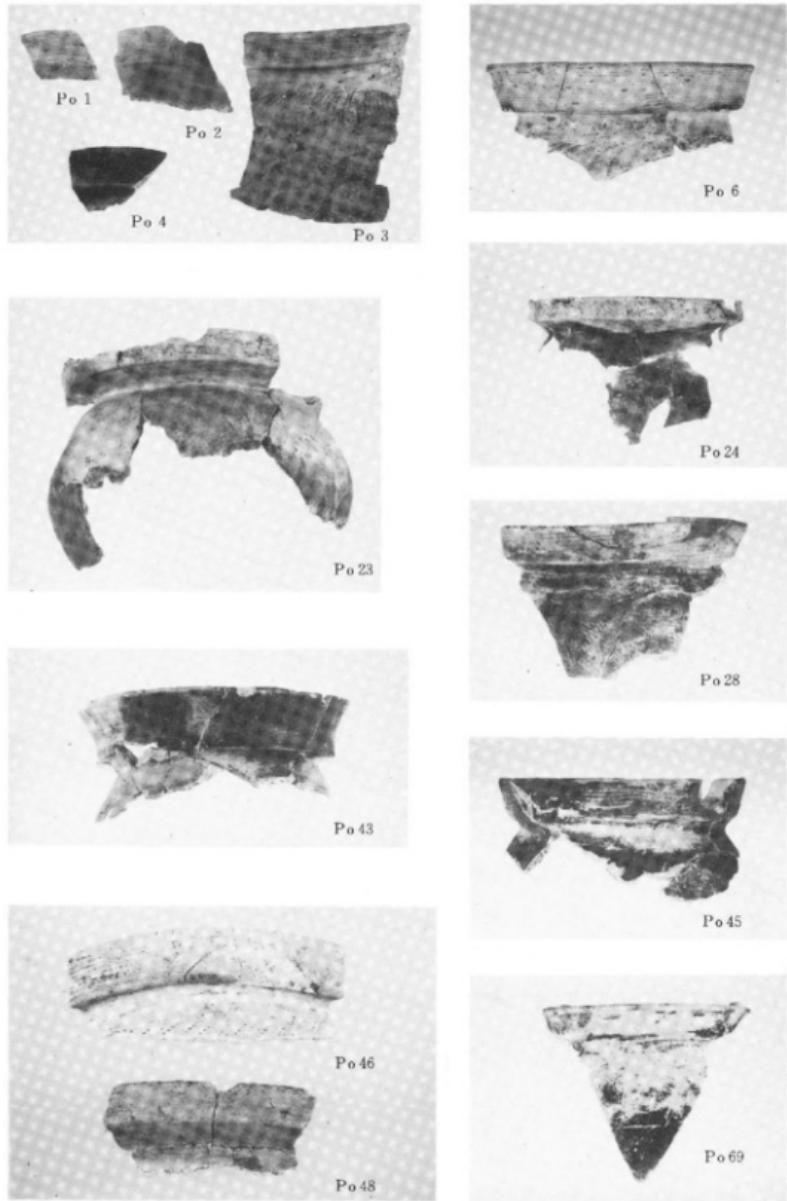


(南より)

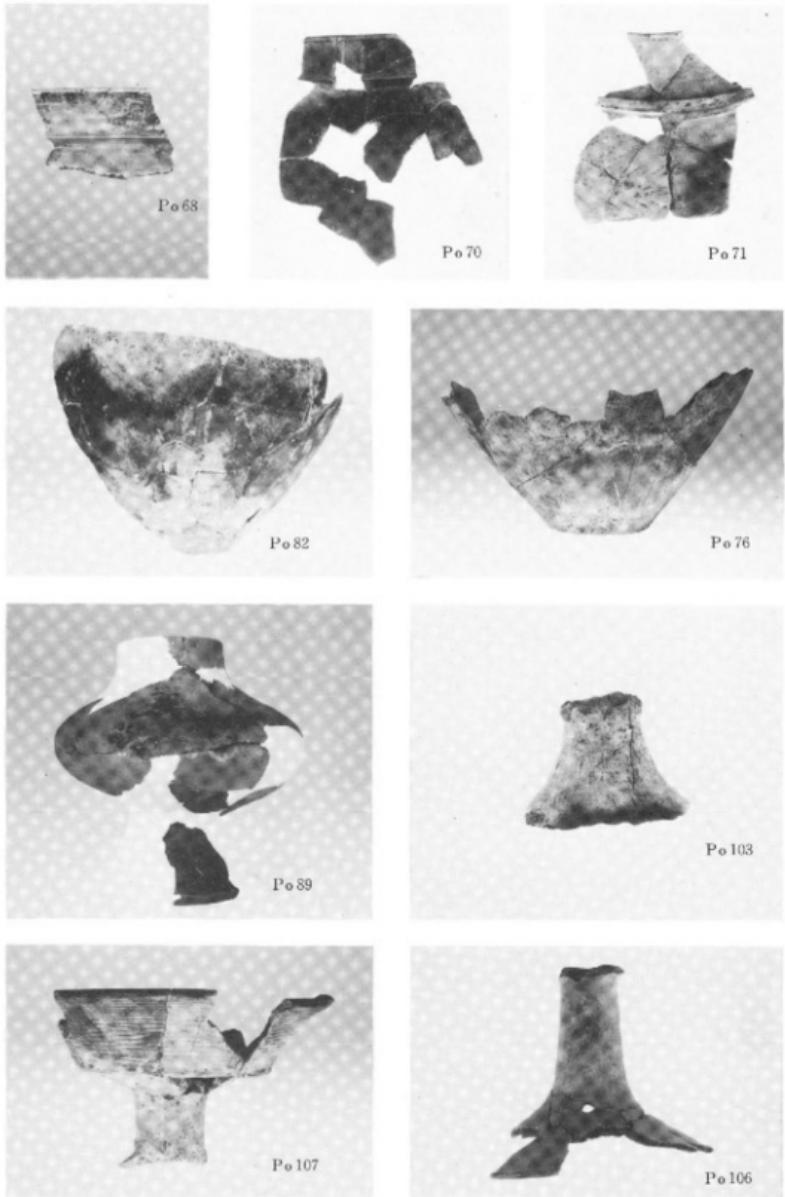


(南より)

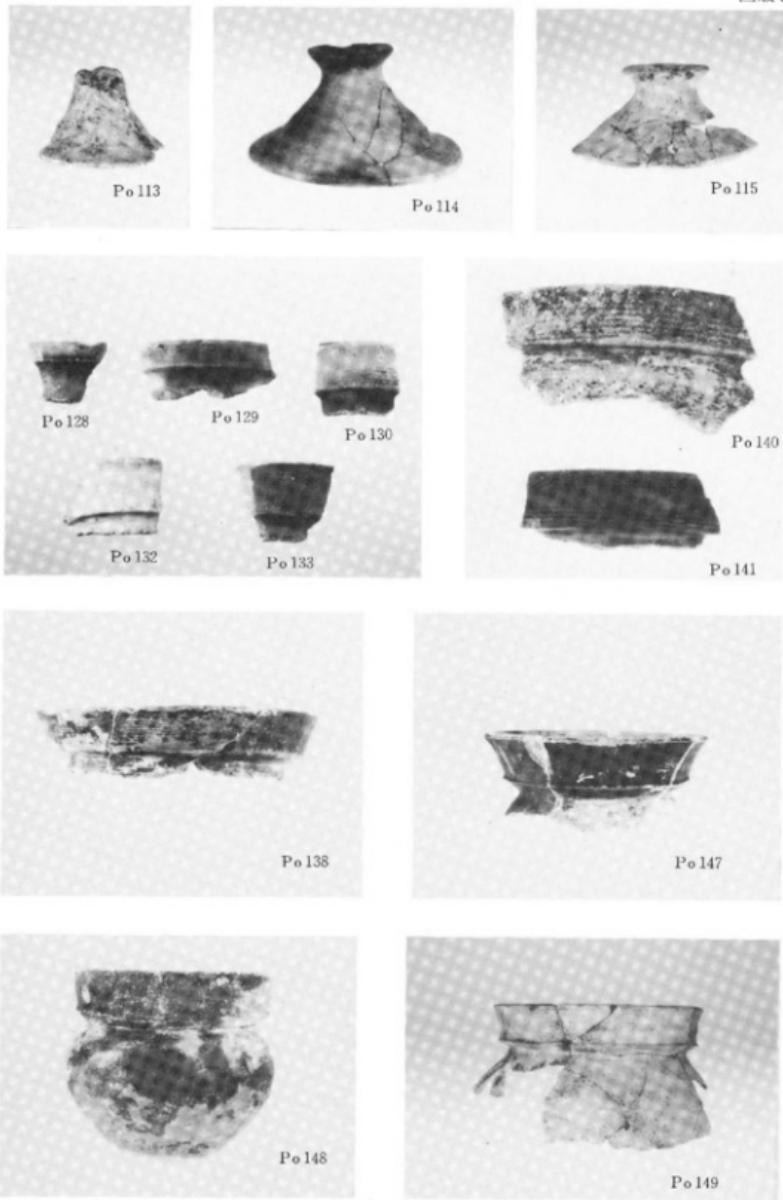
奈免羅古墳石室残存状況



第1号溝状遺構出土遺物①



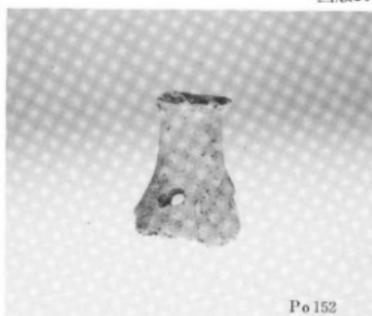
第1号溝状遺構出土遺物②



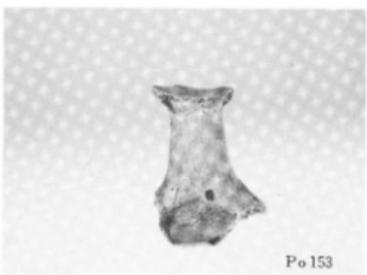
第1号、第4号、第5号溝状遺構出土遺物



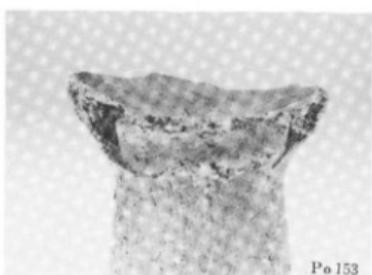
Po 154



Po 152



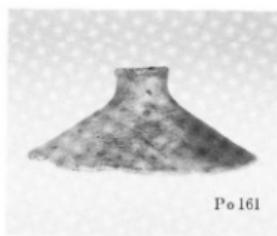
Po 153



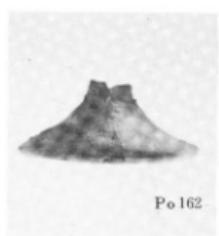
Po 153



Po 160



Po 161



Po 162



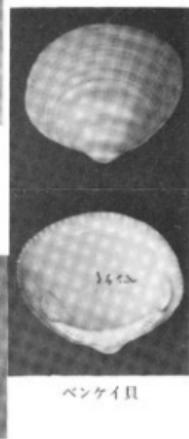
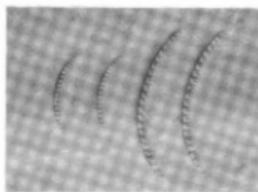
縄文土器



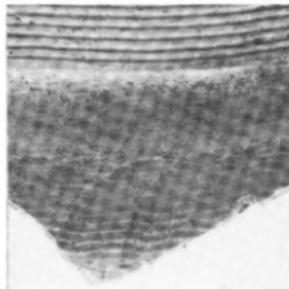
Po 169



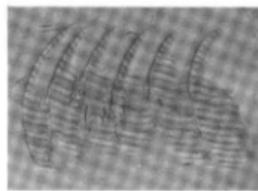
ベンケイ貝腹縁押圧文



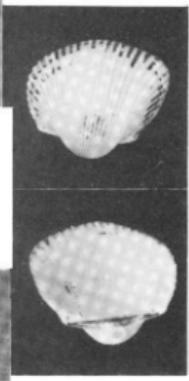
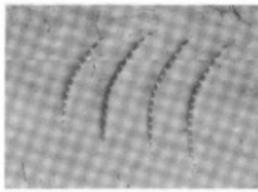
ベンケイ貝



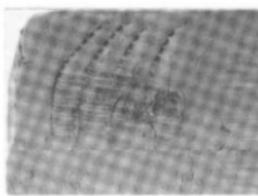
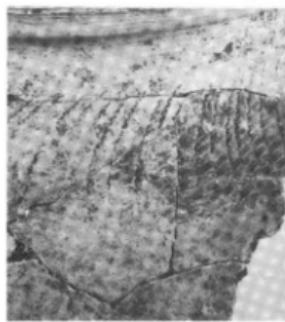
ベンケイ貝腹縁押引沈線（原体左→右）



サルボウ貝腹縁押圧文



サルボウ貝



サルボウ貝腹縁押引沈線（原体左→右）



奈免羅古墳Po 1



奈免羅古墳Po 2



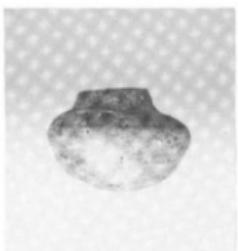
奈免羅古墳Po 3



奈免羅古墳Po 4



奈免羅古墳Po 5



奈免羅古墳Po 6



大谷平Po 1



大谷平Po 2



大谷平Po 3



大谷平Po 4



大谷平Po 5



大谷平Po 6

奈免羅古墳、大谷平古墳出土須恵器

奈免羅・西の前遺跡

発行 1986年3月25日

編集者 | 船岡町教育委員会

発行者 〒680-04

鳥取県八頭郡船岡町船岡539

TEL (08587) 2-0044

印刷所 第一印刷有限会社

〒680 烏取市田島441

TEL (0857) 22-0666